

275

52

始





278  
52

修書割話

少年立志公冊

紫蓮著







275-52

修善寺刻語

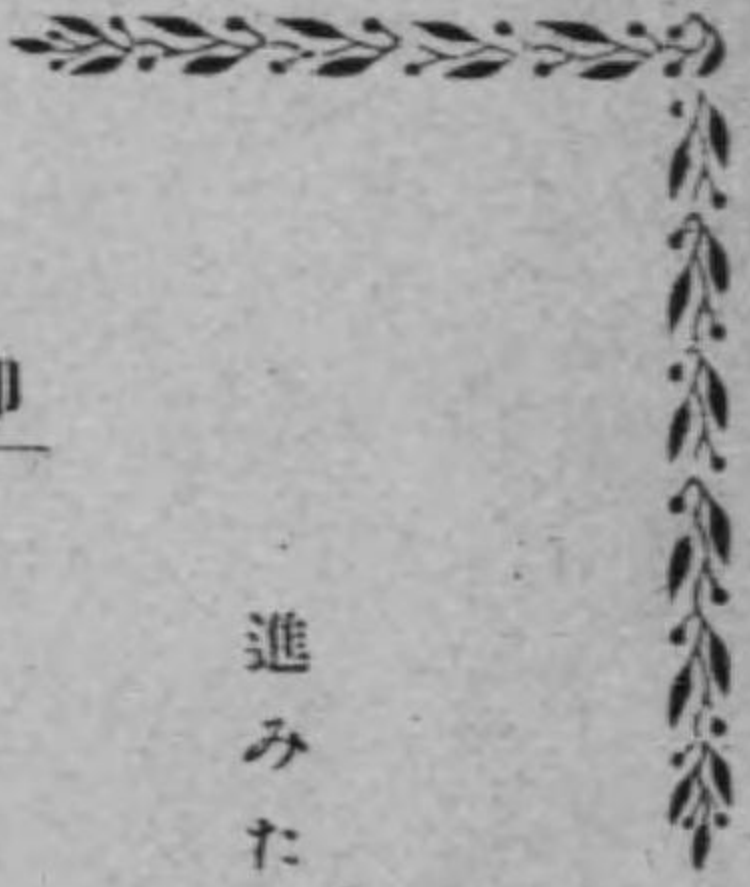
少年立志公冊

繁遜著

大正  
7.11.24  
内交







御 製

進みたる世に生れたるうなぬにも

むかしの事を先教へなむ

たらちねの庭のをしへはせまくとも

ひろき世にたつもとぬとはなれ

易くして成し得難きはよの申の

人の人たるおこなひにして







大倉喜八郎

高野長英

小川泰山



松平信綱



福澤諭吉



徳川光圀



勝安房



新島襄



堀保一



岩崎彌太郎



古川市兵衛



毛利元就



伊藤隆仁

藤田東湖

本居宣長



豐臣秀吉



二宮尊徳



高田嘉兵衛



徳川家康



佐久間象山



新井白石



圓山應舉



熊澤蕃山



貝原益軒



熊澤 藩山 音字の教  
上をして立てしめんとせば下可ならず下をして可ならしめんとせば上立たず上下相和して始めて離亂の憂なかるべし

藤田東湖 隘室の誠  
大丈夫苟くも天下の廣居に居らば室の廣狹は我に於て何かあらん

福澤諭吉 勤勞の教  
自ら勞して自ら食へ

### はしがき

ボープといふ人は申しました「名譽と耻辱とは境遇の如何によつて起るものではない。たゞ盡せ、さらば名譽はそこに生じてくる。」と。如何にもその通りです。この世に生れて事業をおこし或ひは學問に志さうとするものは、自分の境遇の如何を考へる必要もなければ、容貌の如何を心配する必要もありません。幼い時から跛足であつた尾藤二洲は遂に大學者となつたではあ



りませんか。「小さな兵士」とのあだ名をつけられたナポレオンは「おれがもう六寸だけ高かつたら、歐洲を震動させるやうな大きな働きは出来なかつたらう。」と申したではありませんか。あまり醜い顔だからといつて二回までもお嫁さんに嫌はれて逃げ出された安積良齋は、そのおかげで奮發して大學者となつたではありませんか。これ皆その名譽は一旦志を立てるとどこまでも奮闘力戦した結果にほがはありません。「一心

定まつて萬物服す。」とは莊子の言であります。實にやこの一心こそ、人の成功を左右するものです。

したはしき青年少年諸君、諸君の前途ははるかであると共に又光明がみち／＼てゐます。しかしながら、人生の奮の時代は長くはありません書中にかゝげた偉人の言行を手本として、どこまでも意志を強くし、やがて開かんその花をして、天晴れ氣高く香高からしめていたゞきたい



少年立志篇  
次目

○本居宜長……………一	○藤原博雅……………七
○高田屋嘉兵衛……………八	○熊澤蕃山……………七
○新井白石……………六	○伊藤仁齋……………七
○貝原益軒……………五	○豊臣秀吉……………七
○藤田東湖……………三	○徳川家康……………七
○二宮尊徳……………三	○丸山應舉……………七
○森 蘭 丸……………五	○小川泰山……………七
○佐久間象山……………五	○徳川光圀……………七
○山本勘助……………六	○堀 保巳……………三

ものです。こゝにこの書を編んだのもこの趣旨にはかはありません。ねがはくば前途有望なる少年青年諸君が座右にこの書をおいて、常に修養と努力につくされたならば、著者の本望は達せられるのであります。

大正二年九月

紫 逕 識



修養少年立志篇

森脇紫逕著

本居宣長



しきしまの大和心を人間はば

朝日に匂ふ山ざくら花

一點の曇りもなく晴れ渡り、ほがらかな氣澄んだ朝、東の空からうらくと昇る朝日の光は如何に氣高く美しいものでせう。更にこの朝日の光りが、今を盛りと咲き匂ふ山櫻の花に照りそなた時は、いかに神々しくいかにいさぎよく思はれるでせう。

この歌の作者本居宣長こそ、この朝日にほふ山櫻の花よりも美しい潔い心をも

少年立志篇 次目

○山崎 閣齋……………	二六	○福澤 諭吉……………	一七
○山田 方谷……………	二七	○新島 襄……………	一八
○毛利 元就……………	二八	○古川市兵衛……………	一九
○高野 長英……………	二九	○川崎 正藏……………	二〇
○小田 雪舟……………	三〇	○大倉喜八郎……………	二一
○加々美 光章……………	三一	○松平 信綱……………	二二
○伊勢屋 吉兵衛……………	三二	○勝 安房……………	二三
○綾部 道弘……………	三三	○高島 秋帆……………	二四
○石 多仲……………	三四	○岩崎彌太郎……………	二五



つて、大和心を養ふことにつとめた人でありました。而もその學問は大層深く、

國學の四大人とまでうたはれた學者であります。

本居宣長は、伊勢國松坂の人で、家の名を鈴の家といつてゐました。その遠い祖先は桓武天皇から出た平民だといひます。父は定利といつてゐましたが、三十五六歳になつても兒がないので、大和の吉野に祭つてある水分神社に願をかけて祈りました所、やがて享保十五年五月七日の夜子の刻といふに、一人の男の子が生まれました。これが即ち後に大學者となつた宣長であります。幼名を小津富之助といつてゐましたが、後に通稱を彌四郎といひ終に中衛とあらためました。名ははじめ榮貞といつてゐましたが、のを後に宣長と改めたのです。寶曆二年に、小津といふ姓を改めて、もとの本居に復せられました。

宣長が八つになつた年、はじめて西村三郎兵衛といふ人を先生として手習をはじめてゐましたが、十一歳になつた時、お父さんが江戸の店でなくなつたものですから、そ

れからはお母さんの勝子といふ人の手一つで育てられました。十二歳になつて、齋藤松菊といふ人について手習をし、又岸江之中といふ人について四書を學び、そのかたはら、猿樂の謠曲も習ひました。又十七歳になつて、濱田端雪といふ先生について弓を射る術を學び、十九歳の時に山村吉衛門から茶の湯を教へて貰ひ、二十歳になつて和歌の稽古をしました。又この年、正住院といふお寺の坊さんについて五經を學び、間もなくその本を全部讀み終りました。かくて學問に餘念なく勉強してゐましたが、二十一歳頃になつてからは一層學問に力をそぐやうになりました。

元來宣長の家は商業をしてゐたのでしたが、お母さんの勝子が思ふのに、

「この子は本を讀んだり字を書くことは大層好きであるが、商業の道にはうとくて適せぬやうである。商業などを稽古さすよりも、一層醫者とする方がよからう。」

と、遂に宣長を京都へやりました。

宣長は寶曆二年、年二十三で京都へ上り、堀景山に従つて儒學を學びました。二十五



歳になつて武川幸順法眼の弟子となつて醫術を學び、その家に寄宿する事になりました。

宣長は醫學や儒學を勉強するかたは、我が日本の國文學にも大層熱心で、その研究を怠りませんでした。所が二十七歳の時に、はじめて僧契沖の著した數種の國文學の書物を讀んで大層悟る所があり、それから一層國文學の方に力を入れるやうになりました。

宣長は京都に居ること六年、この間に醫術の道もほゞ達せられたので、これから郷里松坂にかへつて小兒科の醫業を以て家を立てました。

所がこの年又加茂眞淵の著した書物を見て大層感心し、この眞淵を非常に敬つてゐました所へ、眞淵は名所舊蹟をたづねて松坂へもやつて参りました。そこで宣長はその宿へいつて出逢ひ、遂に弟子となりました。これが三十四歳の時であります。

まもなく眞淵先生は江戸へかへりましたが、その時既に眞淵先生の弟子には、橋千蔭

だとか、村田春海などいふ、歌に文に漢學に、はた諸藝にすぐれた人々があつたにもかゝはらず、先生は弟子共を集めて、

『今度伊勢の松坂で一人の弟子を得て歸つた。それは本居宣長といふ人であるが、この人は年こそ若けれ、志が正しく、學問がすぐれ、物事に辛抱強くて未だのもしい人である。我が志をついで日本の國體をとき人の道を教へ、君臣の分を正しくする人はこの人をおいて他には無いと思ふ。』

とまでいつて、世に得がたい弟子を得たといふので祝ひの宴をしたといふのでも、如何に宣長が學問に熱心で辛抱強く、心が正しかつたかといふ事がわかります。しかし弟子となつたとはいふものゝ、矢張り松坂に居つて手紙などで事をたづねたのであります。

眞淵先生の弟子となつてからは、一層奮發して、努力したが上にも努力して、國文學の研究に一日一時もおろそかにしませんでしたから遂には道の奥までもきはめて、天



晴れの國文學の大先生として世の人の尊敬をうけるやうになりました。  
宣長の著した本に、古事記傳といふのがありますが、これは三十五歳の時から六十九歳の年まで、三十五年の間一日の如く、倦まずたゆまずその精力をつくして成就したもので、この書物によつて、我が國の學者は如何に益を得たかわかりません。  
宣長の名は、今は天下に隠れないものとなつて、その學徳をしたふ者も多く、諸所の大名家などの教を乞ふものさへあり、又親王様方にも拜謁を仰せつかれました。  
後京に上りましたが、その時も多く公卿の方々から召し出されて講義などしたことは數知れぬ程でした、が、その度々に宣長の名は高くなつて、それは、大層な評判でして。

宣長翁の短歌四五

宣長は遂に七十二歳の秋、なくなりましたが、その名と功績は凡五十部百三十餘卷の書物に残つて、幾百千年の後々までも人々かう敬ひ尊ばれるのであります。

さし出づるこの日の本の光より

こまもろこしも春や知るらん

見わたせば花よりほかの色もなし

櫻にうづむみよし野の山

涼しさを包みて歸るよしもかな

袖師の浦のなつのよの月

吹く風もにはかにすし夕立の

空にまよひて秋や來ぬらん

吹くとなき風になびきてくる春の

のとけさ見する青柳の糸

いたづらに年は六十になりにけり

なすべき業は未ならずして



さすが又うれしき事も交る世に

憂き事ばかり數へられつゝ

### ▲高田屋嘉兵衛

朝日に匂ふ櫻花美しく、白扇さかきにかゝる富士が根氣高き我が國には、外交の波瀾久しく海汀をたゝかす、津々浦々の漣おだやかに、磯の松風は常に平和をうたふこと數千年、太平洋の一隅に不思議にも夢暖かにのましたものゝ、西ヨーロッパの諸國に、一度蒸氣船が出來軍艦が作られた上は、どうしてそのまゝ夢あたゝかに寝てゐられませう。

果せる哉、徳川幕府の末頃になつて、夷敵來の警鐘は全國にひびき渡つて、未だ國民の目に映じた事もない軍艦は北の島に表れ南の沖に見え、未だ國民の耳に入つた事もない大砲の音は、東の浦にひびき西の岸に轟きました。

あはれ一步を誤つたならば、我が神州の國威は全く地におちて、國家百年の憂を殘すといふこの危い時に當つて、豪壯不屈の精神を以つて、獨力よく外人に當り

秋毫といへどもひげを取らなかつた偉人はそも誰れでありませう。

嗚呼、わが高田屋嘉兵衛は實にその人でありました。逆巻く浪を物ともせず、水や空、空や水なる萬里の海を、たゞ一片の小舟に乗り切つて北海に渡り、一度異國に囚はれた身となつて意氣益々上つた豪氣の高田屋嘉兵衛は、そも如何なる人でしたらう。

高田屋嘉兵衛は、明和六年といふに淡路の島に生れました。幼い時から大層氣が強く時には非常な亂暴な事もあつて、子供同士遊んでゐるうちにもひどい喧嘩をさへするやうな事がありました。

だん／＼大きくなつて、或る船頭の家へ雇はれてゐましたが、どうかすると例の亂暴をおこして、仲間のもので争ひましたから、人々は皆嘉兵衛をひどく嫌つて、これと



交るものもありませんでした。

所が嘉兵衛は、長ずるにしたがつて、何か一事大仕事をして、立派なものになつて見たいと思ひ、遂に志を立て、故郷を出で、攝津の兵庫さして行きました。この頃兵庫はすでによい港で、多くの荷物が上げ下しされてゐたのですから、こゝで海上の荷物をはこぶ運漕業をはじめようと思つたのでした。

一度運漕業をはじめるとなつてからは、高田屋嘉兵衛は打つた代つて忠實な男となり、かりそめにもこれまでのやうな我がまゝの心を出さず、たゞ一途にその業にはげみました。

はじめのうちは、兵庫から、長崎下關方面への海路を運漕してゐましたが、何をいふにも機敏な嘉兵衛の事ですから、間もなく餘程の金を儲けましたので、こんどは千五百石積の大船をこしらへて、北海道の松前に航し、盛んに商賣をいたしましたために、とても非常な利益を得ました。

時は寛政十一年、これまで度々北海の近傍に外國の船があらはれて、うつかりして居れば或ひは我が國の地を奪はれるやうな事にもなるかも知れぬと思はれたので、幕府は大いに北海道の方を警衛せねばならぬと思ひ、役人を國後、擇捉の諸島へつかはす事になりました。

この國後島や擇捉島は、度々外國の船が来て寇をしてゐた所でしたにもかゝはらず、こゝへ渡つて行くには海路が非常に難儀で、その邊の土地の者でさへも恐ろしがつてゐる所でした。そののみならず、その土地は大層荒れてゐる上に、北の方の事とて寒氣が非常に烈しいものですから、かつて内地からこゝへ渡つていつた者は一人もない位であります。

幕府の方では、やつとの事で國後島までは行くことが出来ましたが、更らに進んで擇捉島に行くには、大きな船に乗り出して行かねばならず、その航路は未だこれまでに調べたものもありません、二層困難な航路だものですから、幕府の方では大變に心配



して、そこへ船を漕いで行く者はないかと船乗を募集しました。これを聞いた嘉兵衛は、

『國のために働くのはこの時である。幕府の募集に應じて行く船頭がないといふのは甚だ残念であるから、自分は奮つてこれに應じよう。』

と決心して、その由幕府の役人近藤重藏守重といふ人に願つて出ました。すると近藤重藏も喜んでこれを許し、嘉兵衛は遂に御用船頭となることになりました。

そこで嘉兵衛は、重藏に従つて國後島にゆき、『アトイヤ』といふ所にいつて暫らくここに居り、その間に高山に登つて波の様子を調べたり、或は船を海に浮べて風の方角を考へたり、或は潮の流れの緩急をはかりなどして、はじめてその潮の流れが三つに分れて流れてゐるといふ事を知り、非常に喜び勇んでいふには、

『この邊の海には決して暗礁はない。それであるから遠廻りをしてこの潮の流れを避さへすれば、たやすく大きな船で航海することが出来るにちがひない。』

と。そこで嘉兵衛は兎も角一先づ試しの航海をして見ようと思つて、七十石の小船の宜温丸といふのに乗つて、乗組員十四名と共に、遂に國後島を出てゆきました。この時まだ他に二三人の船乗が雇はれてゐたのでしたが、いよく船を出さうといふ時になつて、彼れらも流石この航海が危いと思つたのか、とうとう共に行くことを断りました。しかしながら大膽不敵の嘉兵衛は、これらの意氣地なき船乗をさんん罵つておき、さて近藤重藏に向つては、

『今度國のためにこの航海をしますが、若し成功せぬやうな事があれば二度とお目にはかゝりません。』

といひ放つて、遂に宜温丸を海上に乗り出したのでした。北海の荒波にゆられゆられて船は進んで行きましたが、途中霧が深くて、乗組の者もどうなる事かと心配した事もありましたが、嘉兵衛の取つた航路は少しの間違ひなく、無事擇捉島の『タンネモイ』といふ所に着きました。やがてその地を調べた上で、再びその航路によつて國後



島の「アトイヤ」に歸つて來ました。寛政十二年、嘉兵衛は急行して大坂に行き、五艘の大船に米、磁その他漁業に用入の諸道具を一ぱい載せて函館に向ひ、松前港から近藤重藏等と一緒に擧つて擇捉の「タンネモイ」に向ひ、間もなくそこに着きました。これからはこの島に上陸して、土人を撫育することにつとめ、持つて來た漁具を分配してやつて、懇に魚を取る方法を教へ、こゝに漁場十七ヶ所を開きました。五艘の船に載せて來た米や塩や衣服などの類は、すべてこれを土人に與へました。そこで土人もその恩に感じ、大層漁業にはげみきましたので、産物も大いに増すやうになりました。

後嘉兵衛は功によつて、幕府から三人扶持手當金二十七兩を頂戴して、苗字帯刀を許されるやうになりました。

ある年のこと、ロシア人が千島などに來て非常に人民を苦しめ、或ひは物を奪ひとるやうな事をしましたので、我が國でも大層これを怒つてゐました。そこへロシアの海

軍少佐のゴロブニンといふ人たちが、國後島の近くへやつて來ましたので、幕府の役人はこれを捕へて松前におくり、獄に入れました。

所がこのゴロブニンの下役の士官に、リコルドといふ人がありましたが、ゴロブニンの身の上を心配して、どうかして日本人をつかまへ、その日本人にゴロブニンの様子をたづねやうと思つて、日本船の來るのを待ちかまへてゐました。

そんな事とは少しも知りませんから、嘉兵衛は船にのつて國後島の近くを通つてゐますと、待ち構へてゐたリコルドたちは

『それ日本船だ、早くつかまへろ。』

と、船をこぎよせて來て、嘉兵衛の手下のものたちがうちたへてゐる間に、ロシア人は嘉兵衛やその手下の者を捕へて自分の船にのせ、本船へとつれて行きました。本船には七十人あまりの兵士があつて、みな銃をもつて整列してゐました。その間を嘉兵衛は少しも恐れる様子なく、悠々と通つて行きましたので、リコルドも、これは尋常



の男でない、その大膽なのにびつくりしました。

リコルドは嘉兵衛に出あつて、まづ、

『ゴロブニンたちは無事であるか。』

と尋ねました。嘉兵衛は、その無事であることを答へましたが、何をいふにも言葉が全くちがつてゐますので、十分心を通ずることが出来ず、リコルドも亦これを信用せず、遂に嘉兵衛をカムチャツカに連れて行きました。

嘉兵衛はロシアのカムチャツカに連れて行かれてから、どうかして日本とロシアとの仲のわるくなつてゐるのを直したいと思つて、それからはどうしてもロシア語を學ばねばならんと考へ、給仕の一少年について、ロシアの言ばを稽古しました。

やがて嘉兵衛は、ロシアの言ばも大躰はなせるやうになつたので、或る日リコルドに向つて、

『ロシア人が日本へ来て亂暴をしたのは何故か。』

と問ひました。するとリコルドは、

『それはロシア人の中に亂暴な者がやつたので、ロシアの政府は少しも關係してゐない所である。』

と、答へました。そこで嘉兵衛は、

『それが眞實であるなら、そのわけを書いたものを幕府へ差し出して、その亂暴人のした事を辯解して、あやまればよろしい。然らば幕府もゴロブニン等をロシアへ返し、兩國の争は解けるであらう。』

といひましたので、リコルドは大層喜びました。

それで嘉兵衛はリコルドと共に國後島にゆき、ロシアと幕府との間をいろ／＼と世話して、ロシアからは亂暴な人民が日本に對して悪いことをしたのを謝した書を差し出させることとし、我が國からはゴロブニンたちを返してやりました。

これから暫くの間は、ロシア人が来て千島などへ入り込むことなく、兩國の争ひは一



まづこゝに解けることが出来ました。  
これ全く嘉兵衛が盡力した功でありましたから、幕府はあつくこれを賞しました。  
嘉兵衛はこの後も幕府のために色々盡力しましたが、後には淡路へかへつてそこで静かに餘生をおくりました。

### △新井白石

黒がねのまと射し人もあるものを

つらぬき通せ大和心を

これはかしこくも、先帝明治天皇の御製であります。男子一旦志を立てたならば、如何なる貧困に出逢つても、如何なる難儀に出逢つても、その志を撓めるやうではなりません。爲しがたき事に會つて、志氣を沮むものは大業を爲すこと能はず。とは、身を立てんとするものの一日も忘れてはならぬ所であります。

貧しくして學を勵むに困難なるの時、富豪のために助力を與へようと言はれて、斷然これを退けて、どこまでも獨力を以つて事を成さうとした新井白石の意氣や實に少年の模範とするに足る事でありませう。

新井白石は上總の國久留里藩士、新井與次右衛門といふ人の子であります。小さい時から大層學問が好きでした。まだ十分物のわけもわからぬ三歳の時の冬、炬燵にあたつてゐて、『上野物語』といふ書物を引きよせ、その本の上に紙をあて、小さい紅葉のやうな手に筆をとつて、その中の字をすつと寫しとつてゐました。これを見た父母は、大層びつくりしたといふことです。

七八歳頃になつて、勉強をはじめましたが、もとより學問好きの白石のことですから一心につとめ勵んでゐましたが、その頃字を習ふのに、晝は三千字、夜は千字づゝ習ふことに定めて、それを習つてしまはないうちは、どんな事があつても寝ぬ事にしてゐました。冬の夜の寒い時、白石はをり／＼この課業をまだ終らぬのに、眠けがさし



て来ることがありました。

「一旦志を立て、勉強しようと思ふものが、まだ課業も終らぬのに睡いやうでは駄目だ、こんな事で立派な者になれるものか。」

と、心のうちで自分を叱つて見ますが、それでも折々ふら／＼として、眠くなります。そこで白石は、眠けがさして来た時には、いつも井戸端へいつて冷い水を手桶にくみ自分は裸になつて、これを何杯となく頭からちやぶ／＼とかけました。冬の寒い夜半頃、凍るやうなつめたい水を全身にかけるのですから、思はず身も引きしまるやうで心もしつかりして来ます。かくて目が覺めると、又も机に向つて一心と字を習ひ、定めの日課を終つてから寝たといふことです。

こんなに熱心に勉強したものですから、十一歳になつた頃には、もう餘程字も上達してゐました。久留里の藩主に命せられて、秋庭訓往來といふ手本を清書して出して、大層褒めて貰つたのもこの頃のことでした。白石が十六七歳になつた頃には、もうよ

ほどの學問をつんでゐました。

十八歳の時、白石は久留里藩で宿直をしてゐましたが、宿直にもかゝはらず、近邊の山で人が狩をしてゐるのを見にいつたのが罪となつて、遂に藩侯から閉門を仰せつかりました。つゞいて茲にまた白石にとつて不幸な事が出来ました。それは、久留里藩主の土屋利直といふ人が死んで、その子の頼直が新たに藩主となりましたが、白石の父は、之れまで長らく仕へてゐた利直侯がなくなつたので、自分も年をとつたので、隠居して髪を剃り、江戸の淺草の法恩寺といふ寺へいつて、なくなつた利直侯のためにそこで念佛など唱へて暮してゐましたが、新しい藩主の頼直侯は、誠に亂暴な人で、白石の父のすることを大層きらつて、

『もう已れの家來にはせぬ。』

といつて、財産も何もとり上げてしまひ、白石の役も祿も全くとり上げてしまひました。



あまり豊かになかった白石の家は、財産も取り上げられてしまつて、實に苦しいことになりました。その日々の食ふ米さへ、常に不自由勝ちであつたのです。そこへさして、又も白石にとつて大層悲しい事が起りました。それは妹がなくなつたのに引き續いて、母が六十三を以てなくなつたことでした。そこで少しばかり残つてゐた衣類やら道具まで殆んど皆賣り拂つてしまはねばならぬやうになりました。かく家が貧しくなつても、白石は一旦學問に志を立てたからは、少しも志を屈しません。ますます心を堅くして、一心に學問を勉強してゐました。所がその頃、河村瑞賢といふ大層な金持がありました。この人が、白石を見込んで、『あの男は、ゆくゆくは屹度立派なものになるにちがひない。』と思つて、自分の娘をやつて、その上學資金を澤山おくつて勉強するのを助けてやらうと思ひ、その由を白石に話しました。白石はその日々の食べ物も十分に食べず、一心に學問にばかり精出してゐるのです。

から、今澤山の金を貰へば、それで安樂に暮して、思ふやうに勉強も出来、其上多くの書物も思ふがまゝに買ふことが出来るのですから、どれほど勉強がしやすいかも知れません。そこで瑞賢も、白石は喜んで承知するだらうと思ひの外、白石はそれをことばつて、『私がかつてこんな話を聞きました。昔支那の靈山といふ山に、一匹の小さな蛇がゐました。或る人がこの蛇を見た時にその咽の邊に小さな針ほどの傷をつけました。その時この小蛇は直ちに逃げていつてしまひましたが、幾年かの後に、その山で一匹の大蛇が死んでゐました、見れば咽の邊に非常に大きな傷がありました、この傷は實に小蛇の時に、人のために針ほどの傷を受けてゐたその傷なのであります。かの小さい傷は、小蛇が大きくなるのと共にだん／＼大きくなつて、遂には小蛇が大蛇となつた頃には、その傷は大蛇の命をも奪つて、それを死なしてしまつたのであります。』



今私が貧乏で難儀をしてゐるのですから、あなたからお金を澤山戴けば、私にとつては實に幸福な身となります。私は元來自分一人の力で勉強して立派な者とならうと思つてゐるのですが、今あなたのお助を受ける事は、かの小蛇が針ほどの傷を受けたのと同じ位なことせう。併し、若し私が後に立身する事が出来た時に、あなたのお蔭で出世が出来たのだと人から言はれると、私にとつては、靈山の大蛇がために命を失つた程の大傷とならうと思ふのを心配します。お志は有りがたいが男と生れたからは、自分一人の力で、他人の助けは受けずに學問して見たいと思ひますからこの段おことわりを申し上げます。』

といつて、きつぱり断つてしまひました。

かくて白石は熱心に勉強し、後には木下順庵の門に入つて一層學問をつみ、遂には立派な學者となり、將軍家宣に仕へて重く用ひられ、政事についても色々力をつくしました。

### ▲ 貝原益軒

來しかたは一夜ばかりの心地して

やそちあまりの夢を見しかな

辭世の歌を残して福岡荒津の金龍寺に永く眠れる偉人こそ、恭謙遜讓一生を通じて變らなかつた學徳共に高い貝原益軒先生であります。

徳川幕府の初め頃、學問が俄に起つた時に當り、多くの學者が互に流派をこしらへて相睨み合つてゐた中に、獨り學徳二つながら相備つて、天下の人々を益する書物數百を著した稀代の經世家こそこの先生であつたのです。いでやこれからこの先生の傳を書いて見ませう

頃は寛永七年十一月十四日、今からざつと二百九十年ばかり前、福岡の城主黒田氏の官舎中に、一人の男の子が生まれました。父の名は貝原利貞、その頃名高い醫者として



人々が尊敬してゐた人であつて、この男の子こそ、後に名をあげた大學者貝原益軒先生であるのです。

今も申す通り、お父さんは醫者としてその名高く、又性れつき大層温厚篤實な人であつた上に、そのお母さんも亦大層徳があつて慈愛深い人でありました。この父とこの母とをもつて生れた益軒先生でありますから、遂には名を揚げて教を幾百年の後までものこしたのは、故のないことではありません。

梅檀は二葉より香ばしく、駿馬は生れながらにして千里の逸足ありといつてゐますが益軒は幼い時から身體はあまり健かではなく、かよい方でありましたが、生れつき物事にさとい、他の子供とは何となく違つた所がありました。歳七つになつて初めて字を習ひ本を読むことを學び、九歳の時から兄さんを先生として支那の書物を學びました。この兄さんは京都で大層勉強をし、歸つて藩の需官をつとめてゐたのでした。益軒は學問をはじめてからは一心に勉強の勵み、一度ならつた事は幾度も丁寧に復習し

一字一句もかるくしくは見ず、皆その頭の中をさめて記憶しておくやうにし、忘れてしまふやうなことは決してありませんでした。

年が長じると共に、益軒の學問はいよゝ深くなつて、ありとあらゆる多くの書物を讀んでしまひました。かくて益軒は一かどの學者となつて、つらゝ考へて見ますのに、

『自分は幼い時から身體は弱いにもかゝはらず、かく學問に志を立て、勉強して來た。もしこのまゝ身體の方を大事にしなかつたならば、弱いからだは一層弱くなつて、遂には身をそこねる様になるかも知れぬ。男子と生れて、かりにも身を立て大仕事をやつて行かうと思つたならば先づ第一に身體を強くせねばならぬ。』

と、こゝに於て益軒は儒學の書を読むかたはら、醫者の書物もよく讀んで見て、これによつて身體の養生をすると共に又身を鍊つてゐました。

益軒が二十歳になつた頃には、早くもその名は國內の評判となつて、何時しか藩の黒



田侯の耳にも達しました。藩主は益軒がつゝしみ深くて君子の風があり、後にはきつと名をあげるであらうと見こんで、遂に京都に行つて勉強するやうにとの有がたい命が下りました。益軒の喜びはどうでしたらう？、喜び勇んで直ちに京都に出てゆく事になりました。時に年二十三でありました。

益軒は京都へいつてからは、山崎闇齋や木下順庵や、松永尺五などゝいふ學者が、多くの弟子どもに講義をしてゐる所へいつて、その主張を聞いたり學問の説をくらべなとして、自分の信じてゐる所と相照らし合せて研究をしました。又藤井懶齋だとか、中村惕齋だとか、或ひは米川操軒などといふ、その當時名高かつた多くの學者とも親しく交つて大いに勉強をしました。

月日は流るゝ如く過ぎ去つて、益軒が京都へ來てからはや三年の年月がたちました。知識をひろめて學業が非常に進んだ益軒の評判は、京都中の誰れ彼れとなく口々に賞めたゝへてゐましたが、このよい評判が郷里の黒田侯にも非常に満足に思はれ、衣服

を賜り祿を増して之れを賞されました。

萬治三年といふ年、益軒は郷里福岡へ錦をかざつて歸つて來ました。益軒一家の者の喜びはどうでしたらう。それにもまして喜ばれたのは藩主黒田侯で、直ちに藩の儒官として重く用ひられました。

その後も益軒は愈學問にはげんで倦むことなく、藩のために勤めましたので、その學問の深いことと徳の高いことは、天下に知らぬ者もない位でありました。益軒の名今や天下に廣まつて、上は將軍より下は貧乏書生に至るまで、その教へを乞ふものは門前に引きも切らなかつたといひます。諸大名の中にも益軒の教を受けた人は少くありませんでした。かく名譽な地位となりましたが、益軒は少しも高ぶるやうな事はありませんでした。

或る時のこと、益軒の庭に美しい牡丹が植ゑてあつたのを、書生か角力をとつてあるうち過つてこれを折つた事がありました。この牡丹は益軒が非常に愛して大切にしてい



ゐたものでしたから、どんなに叱られる事だらうと思つて、書生は非常に恐れ、自分であやまりに行く元氣もなくて、隣りの人を頼んであやまつて貰ひました。すると益軒は、

『私が牡丹を植ゑてゐたのは楽しむためである。怒らうと思つて植ゑたのではない。』といつたきり、少しも氣にかけた風がありませんでした。

又或る時益軒は京都から福岡へ歸る途中、多くの人々と共に海の上を船で通りました。船旅のつれづれに、乗り合つてゐた人々は色々な話などをしてゐましたが、その中に一人の年若い男があつて、如何にも高慢な顔をして、支那の書物の講義をしてゐました。學問の深い益軒が聞けば、定めてまちがつた事をえらさうにしやべつてゐたのでせうが、益軒は丁度自分は字など一つも知らぬやうな顔をして、たゞ黙つたまゝその話を聞いてゐました。やがて船は岸について、乗り合ひの人々は互に名を告げて別れますので、益軒も同じやうに、

『私は福岡の貝原久兵衛と申す者です。』と申しますと、この言ばを聞いた前の少年は、くわつと顔を赤らめて、自分の名は告げもせず、こそくと逃げ隠れるやうにして去つてしまつたといふ事です。この少年の心のうちでは、

『自分は何も知らぬ癖に漢文の講義などしたが、音に名高い益軒先生があつた船の中に居られるとは露思はなかつた。定めし自分のいつた事の中には間違ひもあつたらうに、あゝ恥かしい事をした。』と思つたのでせう。

益軒が心廣くて徳が高く、自分は學問が深くても少しも高ぶるやうな事なかつたのは、概ねこの類です。

正徳四年秋八月二十七日、益軒は遂に福岡城下にてなくなりました。時に年八十五歳でした。



益軒の著した書物は百餘種もあつて、すべてむつかしい文字文章をさけてやさしい文章とし、世の中を益するもののみでありました。

△藤田東湖

死 爲ニ 忠 義 鬼 極 天 護ニ 皇 基

と吟じ、

荷 明ニ 大 義 正ニ 人 心 皇 道 奚 患 不ニ 興 起

斯 心 奮 發 誓ニ 神 明 古 人 有 云 斃 而 已

と歌つて片時も君國を忘れなかつた人は誰れであらう。嗚呼、水戸城の西常盤の原、夜陽影暗き所に英魂を弔ふの時、『表誠』と題せられた碑を見て先づその人となりの慕はれるのは、徳川幕末の志士、藤田東湖であります。この言や誠によく東湖の志を表したもので、彼れ東湖は實に正義の人で、片時も君國を忘れなかつた人でありました。

つた人でありました。

藤田東湖は常陸水戸藩の士でありました。文化三年春三月、仙波湖の傍に呱呱の聲をあげました。名は彪、通稱を寅之助といつてゐましたが、後誠之進と改めました。字は斌卿、東湖はその號であります。

父は一正といつて、號を幽谷となへましたが、幼い時から非常に賢く、神童とまで云はれてゐた人でありました。性質豪邁で、子弟を導くのに一日といへども文武忠孝の道を忘れず、尊王の心の非常に厚かつた人でした。東湖はこのお父さんに育てられて成長したのであります。後に立派な人となつたのもわけのない事ではありませ

ん。東湖は六歳の時から、父について孝經を學びましたが、その頃から又非常に劍道に心をよせて、その方も熱心に習つてゐました。所が武藝の方は非常に好んでゐましたが、讀書する事はあまり好まず、毎日馬を走らせたり、木劍を振りまはしてゐましたが、



年十五ばかりになつた時に、大いに悟るところがあつて、

『如何に武勇にすぐれたものも、學問がなければ眞の勇士とはなれず、如何に學問にすぐれたものも、武藝のたしなみがなくては到底誠の學者とはなれぬ。自分も武士としてはづかしからぬだけの武術を學ぶと共に、學問にも心をはげまして勉強せねばならぬ。』

と、かたく心にきめて、それから奮發して書物の方にも勉強しました。

後父がなくなつて、その後をついで祿二百石を賜はり、藩主につかへて進物番といふ役に任せられ、又彰考館に職をつとめるやうになりました。或る時書を彰考館の總裁に送つて、その館の事に關する五つの事を論じましたのに、その議論の文が非常によろしかつたので、人々ははじめて東湖の學問の深い事を知つたといふことです。

その中水戸藩では、徳川齊昭侯が封をつがれる事となりました。侯は景山と號し、死後烈公と諡しましたが、四歳で孝經を讀み、五歳で和歌を詠じ、九歳になつて銃法刀

槍の術を學び、幼い時から文として武として、學ぶ所達せざることなく、實に文武に秀でた人でありましたが、封をついで藩主となつてからは、専ら政治につとめ、心を民事にそゝいで藩の政を大いによくしましたので、よい臣は用ひられ悪い臣は退けられ、學問は盛んになり武備は整ひ、人民皆その徳をしたひました。

東湖が重く用ひられかけたのも此の藩主でした。齊昭侯は東湖の才智のあるのを見込んで、これを上げて郡奉行の役に用ひました。東湖は郡奉行となつてからも熱心にその政治につとめ、人民も非常に喜んでゐました。後いろ／＼な役にうつつて、側用人又は馬廻番頭などゝいふ重役に上げられました。

所が弘化元年に、東湖は幕府のために罪せられて、江戸の小梅村に禁錮の身となりました。禁錮せられること殆んど三年、弘化四年十二月といふに、水戸に歸ることを許されましたが、まだ謹慎は解かれませんでした。全く無罪の身となつたのは、嘉永二年八月でありました。かくて人と往來する事も許されたものですから、近い所遠い所か



ら、教を受けようとして頼みに来る者が門に充たといひます。

時は嘉永六年六月、米國の水師提督ペルリ、軍艦をひきゐて浦賀に來たり、天下の人心恟々として、三百年間の泰平の春夢はまさに破れんとしました。

藩公幕府の命を受けて海防の政を議するに當つて、東湖は江戸へ召されて再び側用人となり、後更に學校奉行を兼ねました。

齋昭公の海防の策は、既に時の天皇からもお賞めに預つた所で、東湖の名はこれによつて天皇の御耳にも入つたといふ事です。

所が安政二年十月二日、江戸に大地震がありました。折柄東湖は客を玄關まで送り出して立ち戻つた所でしたが、年よつた母を扶けて一旦庭まで出ましたが、母が

「火鉢の火に土瓶の湯をかけずに出たが、あのまゝ捨てゝ火を消さずにせくと火の用心がわるいから消しておかう。」

といつて、家の中へはいりましたので、東湖は危いことだと思ひ、母を出さうと思つ

てこれも家の中へはいりました所へ、折悪しくも鴨居が落ちて來ました。

しかし東湖は力が強い人でしたから、老母を下にかばうて肩に鴨居を受けながら、片手で老母を庭さきへ投げ出しましたが、その時又も一度ひどく震れましたので、遂に

東湖は押し殺されてしまひ、老母はやつとの事で一命を助かりました。時に東湖は五十歳でしたが、天皇はこれをお聞きになつて、その孝心を感せられ、勅語をさへお下し

になつたといふ事です。

齋昭公は大層これを惜しまれて、水戸へかへつてあつく吊つて葬らせられました。そして公自ら、その碑に「表誠」と題せられました。

### △二宮尊徳

人として此の世に生れながら、いたづらに起きいたづらに眠り、空しく食ひ空しく着て、何事も世のためにすることのない者は、禽獸にあまり遠からぬ人で、尊



敬するに足りません。よく學問をして知識をみがいた人は尊敬するに足るべく、又勤勉にして業をなすとげだ人も尊敬すべきであります。たゞに知識をみがき業をなすとげただけでなく、徳をみがきこれを人に施し、多くの人に感化を與へる人こそ一層尊敬すべきであります。

我が二宮先生の如きは、實に學を修めて知識をみがき勤勉にして業をなすとげ、又徳をさめて人を感化した立派な君子豪傑であつて、實にわれ／＼の手下とすべき人であります。

二宮尊徳は通稱を金次郎といひ、天明七年七月二十三日といふに、相模國柏山村といふ片田舎に生れました。家は貧しい上に、その村を流れてゐる酒匂川に、度々洪水があつたため少しばかり残つてゐた金次郎の家の田畑は、五歳の時に一畝も残らず流されて荒地となつてしまひました。こんな風ですから、金次郎の家は非常に難儀で、家内のものの食物さへ自由には得られぬ程でしたから、金次郎はまだ幼い頃から、繩を

なつたり草鞋を造つたりして、それを賣り家のくらしを助けてゐました。所がお父さんは大層酒が好きだつたものですから、金次郎は草鞋など賣つた金で、毎晩一合の酒を買つて来て、これをお父さんにすゝめて喜ばせてゐました。

金次郎の村を流れてゐる酒匂川といふのは、國中の大きな川で、その源は遠く富士の麓から流れて出で、幾十里を経て海に流れこむのですが、その流れが急で、大水が出る度に砂を流し石を轉ばし、堤を押し破つて田地を荒したり家屋をこはしたりして、その害は非常なものですから、その村では毎年堤の修繕やら水よけ工事をしてゐました。このために村の各家からは一人づゝ出てこの仕事をつとめることになつてゐました。金次郎は十二歳の時、父にかはつてこの川普請に出ましたが、自分は幼い者で一人前に仕事をする事が出来ぬと思つて、人が休んでゐる間も少しも休まず一心に仕事をばげました。又、

「こんなに小さい者でも、一人前の役にあてられるのは全く他の人々のおかげで、他



の大人の人たちからお世話になることも度々ある。』  
 と思つて、そのお禮にとて、自分は歸つてから、夜業に草鞋を作つて、それを川普請の場へ持つていつて、世話になる人に配つてやりました。

かくて金次郎は十四歳になりましたが、この年になつて父はひどい病氣にかゝりました。金次郎は大層心配して、晝となく夜となく、母と二人で心をつくして世話をしました。その年の秋頃に、散りゆく桐の葉と共に遂に父はなくなりました。孝行の心の深かつた金次郎の悲しみはどんなでしたらう。

たゞさへ貧しかつた金次郎の家は、お父さんがなくなつて一層困難におちいりました。お母さんは、金次郎に、

『お前と三郎左衛門とは、どうなりとして養ふことも出来るが、末の子の富次郎までは家で養ひかねる。仕方がないから親類へ預けよう。』  
 といつて、富次郎を他所へ預けました。三郎左衛門といふのは、金次郎の直ぐ弟なの

です。母は末の子を他所へ預けたものゝ、自分の愛してゐた子を離れたのですから、その子の身の上が案じられて、夜もよくくはねむりません。毎夜寢床の中でその子の事を思つてため息をついてゐました。親孝行の金次郎はこれを心配して、

『何をそんなに案じて居られますか。』  
 と尋ねますと、お母さんはわざと言ひまぎらして、

『乳がはつて寝にくいのです。』  
 とばかり云ひます。金次郎は心のうちで、

『お母さんは乳が張るといはれるが、あれは末の子のことを心配して寝られないのであらう。』

と思つて、お母さんに向ひ、

『如何に貧しいと云つた所で、赤兒一人養ふことが出来ぬといふ事もありますまい。』

私は小腕ながらも、明日から山へいつて薪を伐つて来てこれを買ひ、少しづつ多



く働きましたら、弟を養ふ位のことはどうにかなりませうから、富次郎はつれてお  
『歸りになつて、家で育てゝはどうでせう。』

といひますと、母は大層よろこんで、夜中頃にもかかはらず、直ぐに出ていつて親類  
から末の子の富次郎を抱いてかへりました。かくて貧しいながらも親子四人が打ち揃  
うて暮すことになりました。

それからといふもの、金次郎は朝まだ夜の全くは明けぬさきから山へ入つて薪をとり  
歸りにこれを賣つて錢にかへ、夜はおそくまで繩をなつたり草鞋を作つたりして、一  
寸の日影もこれを惜しみ、母のためや弟のために身を粉に碎かんばかりに働ましまし  
た。

金次郎はかく仕事にはげむうちにも、人と生れて學問もしなかつたなら、大きくなつ  
て後にきつと悔ゆることが出来るにちがひないと思ひ、常に大學といふ書物を懐にし  
て山へ往きかへりの路すがら、この書物を讀みながら歩いてゐました。

その後不幸にも、金次郎が十六の年、又もお母さんに死にわかれてしまひました。  
父を失つて間もなく、こゝに母にも別れて金次郎等三人は可哀さうに孤兒となつてし  
まつたのです。そこで親類の者たちは相談して、三人の子をわけて預ることにしまし  
た。金次郎は弟とわかれて、萬兵衛といふ人の家へ世話になることになりましたが、  
この萬兵衛は大の吝嗇家で、人の情も知らぬやうな人でしたから、たゞ、自分の家  
の仕事を少しでも多くさせようとはかり考へてゐました。それですから、金次郎が晝  
は一生懸命働いておいて、夜業の後に少しの時間をさいて學問をしようと思ひ、書物  
を讀んでゐますと、

『私はお前を養つてやるには多くの費用もかかるのに、お前は仕事も多くは出来ぬの  
に、勝手な夜學などして油を多く使ふのは實に不都合である。百姓の子が學問など  
してどうする。そんなことをする代りに家の仕事をしておくがよい。』  
といつて叱ります。そこで金次郎はいろいろと考へましたが、若しこのまゝ學問をせ



す、文盲で世を送るやうでは實に残念であると思ひ、それから萬兵衛の家の油をつかはないやうにして、自分で油を得ようと決心し、仕事のあひ間／＼に川端の荒地を耕して菜種を蒔き、七八升の實をとりました。そこで大喜びで、これを油屋へもつていつて燈油とかへて貰つて、これで火をともして夜業の後に勉強をしてゐました。情知らずの萬兵衛はそれでも尙承知せず、

「學問などする間があるのならば、その間に繩となつて家の仕事をせよ。」

といふものですから、金次郎はこれにも逆はず、繩をなつたり藁をこしらへたりして人が寝しづまつた後でそつと火をともし、着物を行燈の上にかけて光が洩れぬやうにし、誰れも知らないやうにこつそりと勉強しました。教へてくれる先生もなければ尋ねる人もなく、夜おそくひそかに勉強した金次郎の苦心は、到底思ひ及ばぬ位でした。

金次郎は、萬兵衛の家に世話になつてゐるうちにも、どうかして家を興したいものだ。

といふ心は、たゞの一日も胸から離れた事はありませんでした。或る時のこと、金次郎は川端の荒地を開いて、人の捨てゝゝゝた苗を拾つて來、これをそこへ植ゑつけました。仕事のひま／＼にこれを世話してゐたおかげで、遂に秋になつて一苞あまりの米を取ることが出来ましたので、大歡びで、

「少しのものを積んで多くするのは自然の道である。この米は今こそ一苞であるが、これをもと／＼して骨をつたならば、自分の家を興すこともむつかしくはなからう。」と、それからは一層骨折つて働きましたので、餘程の米がとれました。

そこで金次郎は、いよいよ自分で家を興さうと思ひ、萬兵衛には長々の間養つて貰つた恩を謝してその家を立ち出で、遂に獨り立ちして行く身となりました。もと自分の住んだ家へ歸つて見ると、柱は傾き軒は朽ち、屋根は大きな穴があいて日の光がさしこみ、あたりには草が澤山はえて、それは／＼非常に荒れ果てゝゝゝりました。それを金次郎はいろ／＼修繕して、やうやう寝起きの出来るやうにし、それから必死となつ



て家業に精出し、破れた粗末な着物を着、まづい食物もいとはず、少しでも餘分の金が出来ればそれを貯へておきました。かくして千辛萬苦の後、やうやくもと賣り拂つてゐた田畑も買ひもどし、一人前の暮しがして行けるやうになりました。金次郎がかく家を興すことの出来たのは、全くその勤勉と儉約との賜物に他ありません。その頃小田原侯の家老に服部十郎兵衛といふ人がありましたが、この人は千三百石の祿を受けてゐながら、家を治めて行くことが出来ず、千兩にあまつた借金をこしらへて、今はどうも仕方なくなりました。この時金次郎は服部家からのたつての願ひでその家を興すことになりました、こゝへ行つてからも、勤勉と儉約とでその家の主従を論し導き、五年間の苦心の末に、千兩餘の借金は綺麗に拂つてしまひ、その上に三百兩の金を餘しました。それをもつて金次郎は服部夫妻に示して、

『五年間の苦心の末、やうやく家をもとのやうにすることも出来て、こゝに三百兩を餘しました。この中の百兩は君の手元において非常の時の用になさるがよろしい又

百兩は奥方の手元にしまつておいて、これも亦家が衰へない用意となさるがよろしい。あとの百兩は如何様にも勝手にしなさい。』

と申しました。服部夫妻は大いに喜んで厚く禮をのべ、

『三百兩の金は残らずお禮の印としても足らぬのですが、後々のためとて我々に下さるのは何ともお禮の申しやうもございません。せめてはその百兩だけなりとお受取り下さい。』

といひますから、金次郎はこれを受取つて、さて召使の者をよび集めて、くれなくも家のために働くやうに言つて聞かせた後、その百兩の金は皆分けて召使たちにやつてしまひました。

天保四年の夏の初頃のことでした、長雨がふり續いて氣候の悪いことがありました。金次郎はこの頃小田原侯の領地の下野芳賀郡を治めにいつてゐましたが、或る時茄子を食て見て、その味が變つてゐるのを見、箸をおいて歡息していふのに、



「今は夏の初めで、茄子の味がよい時分であるのにこの味は秋の末頃のやうな味である。これはきつとたゞ事でない。陽氣が少いからこんなのである。かくては五穀はきつと不作であるに違ひないから、凶年の準備をせねばならぬ。」

と、そこで家一軒について畠一反の年貢を免してやり、物井、横田、東沼の三ヶ村の者に稗を植ゑさせました。所がその村の者どもはこれを信用せず、

「如何に二宮が智慧があつても、年の豊凶を前から知ることは出来ぬ。それに一家に一反もの稗を作つたりなどとすると非常な稗で、そんな食べられもせぬやうな物をつて見た所で置く所もない。役にたゝぬ事をいふ人だ。」

などいつて笑つてゐましたが、それでも年貢を免してやらうとの事でもあるし又命令の事でもあるから、皆その命令通りの稗を作つておきました。すると夏の中頃になつて、降りかけた雨は小止みなく降續き、冷氣さへ加はつて單衣では暮しにくい程になりました。かくて秋になりましたが、こんな悪い氣候だつたため米は少しもとれず、

關東から奥羽へかけての一帶の地は大飢饉となつて、それは／＼は目もあてられぬ有様となり、飢ゑ死ぬものゝ數も知れぬ程でした。しかし彼の三ヶ村の民は、米の足らぬ所は稗を食て飢ゑしのんだものですから、飢ゑ死ぬものもありませんでした。それから引きつゝいて天保七年に、これにも増した大飢饉がありました。この三ヶ村だけは、金次郎のおかげで何不届なく暮すことが出来ました。

▲ 森 蘭 丸

身は一介の少年でありながら、織田信長に事へて近侍となり、岩村の地五萬石を食むに至つた一小豪傑、如何に信長の寵を得たとは言へ、一少年の身でかくまで用ひられた所を見ても、その才智人にすぐれ、その行爲尋常の子供でなかつたことを推しはかるに足ります。

その正直にして廉潔であつた、こと意を用ひることの周到であつた事などは、眞



に志を立てる者の以つて手本とすべき所であります。

森蘭丸は可成の子で、後に長定といひました。

幼い時から、織田信長の側につかへてゐて、大層氣に入つてゐました。或る日のこと蘭丸は信長の刀をもつて側にゐましたが、その時あまり暇で退屈だつたものですからその刀の鞘に刻んである紋の數をかぞへてゐました。信長はこれを見てゐましたが、しかも見ぬ振りをして、何とも云はずにゐました。蘭丸は主人の信長にそれを見られたといふ事は少しも氣づかずにゐました。或る日、信長は多くの臣のゐる所で、

「誰れかこの刀の鞘に刻んである紋が幾つあるかあてるものはないか。若しこの數をあてた者があつたら、この刀をやらう。」

といひました。すると多くの臣は、それ／＼自分の思ふ數を云つて、それをあてようとしています。しかしまだ誰れ一人として云ひあてるものはありません。所が蘭丸はたゞ

一人黙つたまゝで、何ともいひません。信長ははじめ心の中で、

「蘭丸は最初かぞへてゐるのだから、きつと直ぐに云ふだらう。」

と思つてゐたのですが、いつまでたつても蘭丸が云はぬものですから、蘭丸に向つて、

「お前はなぜ云ひあてぬのか。」

とたづねました。すると蘭丸は頭を下げて、

「私がかつてお側でその御刀に刻んである紋を數へた事があります。そしてその數は今もよくおぼえてゐます。今知らぬ風をして、それを云ひあて、御刀を頂くやうなことをしたならば、それは君を欺くといふもので、堂々たる男子のすべき事ではありません。私のだまつて言はぬのは、それを恥かしく思ふからです。」

といひましたので、信長は大層感心し、その刀を蘭丸に與へたといふ事です。

信長或る時蘭丸の才を試して見ようと思つて、室の障子をよく閉てゝおいて、さて蘭



丸に向ひ、

『向ふの室へいつて障子な閉て来い。』

と命じました。蘭丸は直ぐに起つて、向ふの室へ行つて見ました所が、今命じられた室の障子はどれも、ちやんと閉ぢられて、一寸も一分も開いてゐません。心のうちに何故かと思つてゐましたが、命令にそむくことは出来ぬと考へ、しづかに障子を少しばかり開いて、急にこれを閉ぢました。その閉ぢた音は、信長がゐる室まで聞こえませんでした。蘭丸は信長の前へ歸つて来て、

『只今障子を閉ぢて参りました。』

といひました。そこで信長は、

『障子は開いてゐたか閉ぢてゐたか、今聞こえた音は何の音だ。』

といひますと、蘭丸は、

『只今御命令で障子を閉て来いとのことでもございましたが、参つて見ますとどの障

子も閉てゝございました。しかしながら、閉てずに歸つたならば、御命令にそむくことゝ存じまして、一旦開いて後、それを閉ぢて参つたのでございます。只今の音はその音でございます。』

と云ひました。

又信長が、或る時坐つてゐたまゝ爪を切つて、その切つた爪の端を坐敷の上へ散らしておいて、さて数人の側につかへてゐる童を一人一人呼んで、それを拾はせました。一人が拾つてしまへば又そこに捨てさせておいて、その次ぎの子供をよんで拾はせ、拾つてしまへば又座敷へ散らしておかせ、かくして何人目かに、蘭丸は拾ひました。蘭丸は拾つた爪の数をかぞへて見ましたのに、九つしかありません。指の数は十本である筈なのに、爪の切つた数が九つしかありませんから、まだ一つは残つてゐるだらうと思ひ、

『今一つはどこに在るのでございませう。』



と、信長に向つて尋ねました。すると信長は笑ひながら、

『お前はよく物事に氣をつける。何でもその通り氣をつけねばならぬ。』

といひ、自分の掌を開きますと、その手の中から一つの爪が落ちました。

天正十年、中國征伐に向つてゐる秀吉の軍をたすけようと思つて、信長が僅かばかり

の手勢をひきつれて、京都までゆき、その本能寺に宿つてゐた際に、逆臣明智光秀

は遂にこゝを圍んで、主君信長を攻めました。あまり俄のことゝて、何の備もなかつ

た上に、信長の手勢きわめて少なかつたものですから、とう／＼防ぎ切れず、信長は

遂に自殺してしまひました。この時蘭丸は、弟の坊丸・力丸などと共に、力戦して遂

に討死にしました。光秀がこの謀叛は、誰れ一人として知るものもありませんでした

が、蘭丸のさかしい目には、この事が早くから知れてゐたものと見えて、或る時ひそ

かに信長に向つて、

『私が光秀の舉動を見ますのに、どうもその志が小さくはないやうです。後には

きつと謀叛をするにちがひありません。今の中に除かなければ後に悔いても仕方が  
ございません。』

といひました。しかし信長はこれを信用せず、多分蘭丸が光秀を讒言するのだらうと

思つて、これを取り上げなかつたといふ事です。

これを見ても、蘭丸が如何に注意深く、物事によく氣をくばつたといふ事がわかり

ます。

▲佐久間象山

『西條山から鎗がふる

佐久間の門から石が降る

石投げ小僧のやんちや小僧の

あばれ小僧のいたづら小僧やアい。』



所は信州松代の城下、竹山町の裏町を通る數人の子供に向つて、常に玄關から軒下の小石を掴みとつてばらばらと投げかけてゐた一少年、身に生創のたえまもなく、悪戯暴行のあまりの烈しさに、遂にかゝる童謠までうたはれ、郷人のために憎まれてゐた一少年、一たび心を改めて刻苦勉勵し、遂には學を修め身を立て、後の人々からも敬はれるものとなつたのであります。その人は誰あらう、明治二十二年正四位を授けられた佐久間象山その人でありました。

佐久間象山は、今から百年あまり前に、信州松代で生れました。幼い時の名を啓之助後に修理と改めました。象山はその號であります。父は一學といつて、文武兩道にすぐれた人で、藩の人々から尊敬せられるやうな立派な人でありました。

象山は幼い時から體格はよく、忍耐力は強く、物おぼえもよかつたために、學問の進みもわるくはありませんでしたが、何をいふにも非常な片意地で、ともすれば悪戯と亂暴をしたがり、少し習つた學問と武藝とは却つて喧嘩の種子となつて、毎日毎日他人から悪口をいはれたり、訴へて來られたりしてゐました。當時この城下では、象山のことを佐久間の悪戯息子、馬鹿息子とのみいつてゐた程でした。

象山が十三の時、例の如く馬場へ出て馬術を習つてゐました所が、喧嘩好きの象山は家老恩田頼母といと人の子と口論の末、忽ち拳をあげてなぐりあひをしました。そこで相手の僕たちが、象山を捕へて散々にうつた末、これを捨て、走つて歸りました。利かぬ氣の象山は、あとを追うてその家の門まで行き、相手の者が家の中へはいつてしまつたのを見、

「馬鹿者め、侍の法を知らぬのか。知らぬなら教へてやる、聞きに來い。何でも教へてやる。阿呆め、もう一度出て立合へ、卑怯者め。」と、大聲で罵しつて家へ歸りました。

家へ歸ると父一學は、直ちに象山を呼びよせて、

「お前は今日人と喧嘩をして、知らぬ事は何でも教てやるなど、廣言をはいたさうで



ある。一躰お前は何事を知つてゐる？、學問も武藝も未熟であるのに恥かしいとも思はぬのか。』

流石負け嫌ひの象山も、厳格な父の言葉に思はず頭をたれて、一言もなく黙まつてゐます。父は更にことばをついで、

『これから後三年の間、お前が外へ出るのを許さぬ、その間に勉強して、今日お前のいつた言ばに恥ぢぬだけの學問をせよ。』

と。父のこの一言は、はしなくも象山の腸をえぐつて、遂に象山をしてその非をさとらしめました。この時から象山は、これまでの亂暴は全く止めて、身をつゝしみ、一意専心學問にはげみました、喧嘩の時に用ひられた『負けぬ氣』は、今は勉強の方に善用せられて、その學問は日々に進み、議論時には先輩を驚かすやうな事があつて、少年藩士中、嶄然頭角をあらはすやうになりました。

象山は年十七歳になつて、父に請うて江戸に出で、東北の諸藩を巡遊して歸りました

十八歳の時、藩主信濃守幸貫侯の近侍にあげられました。その年不幸にも父は病のためになくなりました。象山は大層悲しんで三年の間喪にこもりました。

二十三歳の時、藩主から學資をもらつて江戸へ修業に出る事が出来ましたので、象山は君恩の厚いのに感涙を流しながら、江戸に行き、當時名高かつた佐藤一齋先生の門に入つて勉強しました。藩主からもらふ金はすべて學資とし、冬の寒い日も足袋もはかずにゐたといふことです。

象山が名を修理とかへたのはこの時のことでした。或る時のこと、有名な書家の巻菱湖といふ人が、象山に向つて、

『あなたの名を修理といひますが、一躰何を修理しようといふ意味です。』

と問ひました。修理とは『をさめと』のへる』といふ事なのです。すると象山は直ちに、

『天下を修理しようといふのです。』



と言ひ放ちました。象山が意氣の盛んなことは、この語からでもおしはかれます。』象山はこの時進取の氣が非常に強く、何でも出來うる限りの知識を得ようと思ひ、刻苦して學問を修める傍、加藤千浪といふ人に歌を教はり、老山といふ人に書を學び、仁木三岳に琴を學び、箕作阮甫、宇田川榕庵に理學を學びました。かくて四年の後、藩主は象山を呼び戻して、御城附月次講釋助役の職を授けました。國にあること三年、再び乞うて江戸に出で、諸生を教へる傍自分も勉強しました。その勉強に熱心なることは夜もよく寝ぬほどで、西洋の書物を読んだり、兵學や砲術を學んだりしました。藩主幸貫が老中となつて、幕府で政をとるやうになつてからは象山はその顧問となり、色々政について意見を申し上げました。又開港の説をとなへて、その時勢に協つてゐたのでしたが、遂に攘夷黨のために忌まれまして、京都三條木屋町を馬にまたがつて通つてゐた夕暮、壯士數人のために斬られて死にました。

山本勘助

『山高きが故に貴からず、樹あるが故に貴しとす。人肥えたるが故に貴からず、智あるが故に貴しとす。』  
 事業をなすには身體の健康なものも必要であります。又氣高い風采も不必要なのでありません。併しながら、人は如何に立派な體格をしてゐても、又風采がよくても、或ひは美しいものを着かざつてゐても、肝腎のその身に價値がなくしては何のやくにも立ちません。然らばその身の價値とは何でせう。立派に職業をつとめて行けることもその身の價値でせう。學問を積んでこれを實地に活用して世の中を益して行くこともその身の價値です。その他自分の家のため、國のために十分つとめを盡し、人たる道を行つて行くことなどは皆その身の價値に他ありません。



塙保巳一は盲でありながら學問をさめて、遂には幾多の書物をこしらへて、その時の人のみならず後の世の人々までも益を興へました。その他盲や跛の如き人でも、普通の人よりも却つて多く世の中を益してゐる人は少くありません。それですから、人は目が見えなくても、足や手がわるくても、それらのことは少しも恥づるには及びません。又顔かたちが醜くても、風采がわるくても、それを口惜しがるの必要は少しもありません。たゞ徳をみがき學を練り、身を立て、世の中を益してゆけばそれで立派な人なのであります。必ずしも完全な五體を要せず、立派な風采を要せぬのであります。まして美しい着物を身にまとふなどの必要はさらにありません。

山本勘助といふ人は、戦國時代の勇將武田信玄の臣でありましたが、身體が至つて小さい男で、色は大層黒く、足は跛でその上目づかちと來てゐますものですから、實に醜い風采のあがらぬ人であつたのです。

はじめ今川義元につかへてゐましたが、義元はこれを用ひず、常に輕蔑の眼で勘助を見、その言ふことは少しも用ひられませんが、そこで勘助は到底立身する見込がないと思つたものですから、暇をもらつて甲斐の國をさしてやつて參りました。甲斐の國には、當時名高い武田信玄がゐたものですから、これに仕へようと思つて來たのです。そこで人に取りついで貰つて信玄に出逢ひ、わけを話しますと、流石は名將の武田信玄だけあつて、勘助に出逢つて見て、

『これはきつと立派な人間にちがひない。たしかに見込のある感心な人間だ。』と思つて、遂に自分の臣とし、その上自分の名の晴信の晴の一字をやつて晴行といふ名にかへさせました。

主人が自分の名の一字をやるといふことは、餘程氣に入つた時でなければせぬことです。

所がこゝに信玄の家來に、長坂頼弘といふ者がありました。この人はずつと以前から



信玄に仕へてゐたのですが、その時になつて、後から事へた勘助が大層主人に信用せられるのを見て、ねたましく思ひ、信玄の前に出て、

『近頃山本勘助といふものをお用ひになつてゐますが、あの男は顔は黒し、身体は小さいし、その上目つかちで躑躅といふ醜い男ですから、あんなものをよい家來だなどと言つて使はれる日には、今川義元はじめ他の大將たちは、甲斐の方ではあんな者でも使はねば役に立つ人間はないのだといつて笑ふにちがひありません。あんな男を重く用ひないで、もつと相當な人物をお用ひになつたがよろしいでせう。』

と言ひました。すると信玄は、  
『おれは山本の姿をとつて家來にするのでない。あの立派な心を取つて家來とし、重く用ひてゐるのである。』

と言ひましたので、頼弘も恐れ入つて引き下つたといふで事す。

それから晴行は信玄につかへて、幾度も戦争に出て行きましたが、信玄の眼鏡にたが

はず、眼こそ目つかちですが、遠くに敵の様子を見ること、それ敵がどういふ工合に押し寄せて來ることから、その敵を防ぐ謀を考へることなどは、實に驚くばかり上手です、信玄も大層感心して、晴行が兵を用ひることは神のやうであるといつて褒めました。こんな風で、晴行の名は追々と高くなつて、多くの武士がやつて來て、

『どうか弟子として軍の法を教へて下さい。』  
と、頼んで來るものが段々とふえて來ました。

或る時のこと、小宮山助太郎といふ子と、小山田八彌といふ子と、それから今一人秋山友市といふこの三人の子供が、晴行にお話をきいたことがありました。所が話をきいてゐる時に、助太郎は話が始まるとちやんと行儀をよくして、口を塞いで手を膝の上におき、正しく坐つて晴行の方を見て、よく考へながら話をきいてゐます。それから八彌は話を聞きながら、時々大きな聲でわらつたり、手や足をばた／＼したりして、すこしも落付いてゐません。又友市は少しだけ話を聞いて退屈し、欠伸をしたり



手をひろげたりして、度々立つてあちらへ行つたりこちらへ行つたりします。  
晴行はこの様子を見て、

「助太郎といふ子は、大きくなればきつと立派な男となるにちがひない。八彌は一向心が定まらぬから、大きな手柄を立てることは出来ないだらう。友市もあれは仕方のない人間になつて主人に不忠義をするだらう。」  
といつてゐました。

この三人の子供は、後に大きくなつてから、信玄の子の勝頼に仕へましたが、助太郎は主人のために忠義な働きをして、戦争の時に立派に討死をしまひました。それから八彌は戦が負けさうになつて来たといふ事を見て、あちらに隠れこちらへ逃げ、とうとう逃げ隠れ通して、少しも勇ましい働きをしませんでした。それから又友市は敵に降参をしてしまつて、後々までも不忠義の名をのこして、三人が三人とも晴行のいつた通りになつたといふことです。

實に山本勘助といふ人は眼こそ悪けれ敵の様子を見たり、人の心を見ぬくことも上手で、又軍の法にかけても實に立派な人だつたのです。

それですから、目の悪い人足の悪い人、その他姿の醜い人も決して落膽することはありませんが、十分勉強しておいて、後には立派な人となるのが肝腎です。又人の醜いを見て笑つたりあざけつたりなどしてはなりません。それらの人の中に、どれ程立派な人があるかもわかりません。

△藤原博雅

「陽氣の發する所は金石も亦透る。精神一たび到らば何事か成らざらん。」とは古人のいつた言ばであります。人がどこまでも成しとげやうと思つて全力をそゝいでその事をやる時には、如何なるむづかしい事も出来ぬといふ事はありません。それですから、一旦志を立て事にのぞんだ時には、どんな難儀な事にも弱らず、



この心をもつて心をこらし、倦み怠る事なくつとめたならば、何事も成就せぬといふ事はありません。

こゝに藤原博雅といつて、大層苦心をして琵琶に上達した人があります。勉強して立派な人にならうとする少年少女や、事を成就しようといふ人たちのよい手本となる人であります。

昔、山城の國逢坂の關といふ所に、さゝやかな庵をこしらへ、世を避けてこゝに只一人、しづかに暮してゐた盲目がありました。

この盲目は目こそ見えませんが、非常な琵琶の名人で、それは／＼實に人わざとは思はれぬ程上手に弾じて、當時我が日本のどこを探しても、この盲目に及ぶものはありませんでした。

所がこの人は、非常に高潔な人で、世の中の多くの人と交るのがきらひで、たゞ一人この山の中の庵に住んで、時々琵琶を弾じてその道を樂むばかりですから、多くの人

が琵琶を教へて貰はうと思つて頼んでも、いつかな事、これを承知してくれませんか。その弾する曲は一つとして神わざでないかと疑はれぬものはありませんでしたが、その中でも流泉、啄木の曲といつて、最も巧妙な秘曲がありました。しかしながら、この流泉啄木の秘曲はまだこれまで誰にも告げた事がありませんから、我が國中に知つてゐる人はこの盲目の外にはたゞの一人もありません。

その頃京都にゐた公卿に、藤原博雅といふ人がありましたが、大層琵琶が好きで、ずっと前からこれを學んで、その道に餘程上達してゐましたが、それでもまだ十分とは思はず、如何にもして巧妙な秘曲を授けて貰ひたいものだと思つてゐました所へ、かの逢坂山の關に住んでゐる盲目が、流泉啄木の秘曲をもつてゐて、まだ人に教へた事がないといふ事を聞き及び、どうかしてその秘曲を授かりたいものだと思ひ、その上この盲目がなくなつた時には、その秘曲は遂に傳はらなくなつてしまふであらうと、大層惜しく思つてゐました。その心止みがたく遂に思ひ立つて、逢坂の關の庵をたづ



ねていつて見ましたが、その盲人の高潔な有様を見て、一語もはなすことが出来ずに歸つてしまひました。

歸つては來ましたものゝ、博雅はどうかしてその秘曲を授かりたいものだといふ心はたゞの一時も忘れる事が出来ません。そこで、それからは毎夜毎夜逢坂の關までいつて、そつと庵の近くに隠れてゐて、盲人が秘曲を弾することがあればそれを聞きとらうと思つて窺ふことが三年の長い月日に及びました。この長い間、毎夜毎夜庵のそばへいつて、今夜こそ聞くことが出来よう、今夜こそ盲人は弾じるであらうと、ひたすらそれのみ待ちました。たえて弾する様子がありません。

所がかくしてゐる中に、或る年の八月十五夜になりました。一點の曇りもなく晴れ渡つた空には、十五夜の明月がいかにも美しく照り渡つて、やゝ冷やかな秋の風は、淋しい逢坂の關の世捨人の庵にも吹き入りました。心地よいこの物靜かな風に吹かれて、盲人の心もおのづと浮き立ち、琵琶をとり出して數曲を弾

じました。この夜も博雅は、いつもの如く庵の傍へ來て隠れてゐたものですから、盲人が琵琶をとり出して弾じかけたのを見、

『あゝ、今夜こそ流泉啄木の秘曲を聞くことが出来るであらう。どうか早くその曲を弾じてくれればよいが。』

と心の中に祈つてゐました所が、折角の望みも遂に消え失せてしまひました。盲人は二三の曲を弾じてその秘曲は弾じかけもせず止めてしまつたのでした。

博雅が心中落膽をしてゐる時に、かの盲人はたゞ一人琵琶の前につくねんとして、

『あゝ、こんな良い夜に、自分と樂しみを共にするべき人は一人もないのであらうか自分の心を語ることの出来るやうな人があれば、どれ程愉快であらうか』

と、ため息をつきながら獨言をいひました。

この聲を聞くや否や、博雅は盲人の前へ躍り出で、自分の名を名乗り、流泉啄木の秘曲を聞きたいがために、三年の間毎夜こゝへ通つた事を語りますと、盲人もその志



を非常に感心して、その夜は夜通し心よく語り合ひ、自分の知つてゐる秘曲を悉く博雅に教へてやりました。博雅は久しき間の願ひがとゞいて、遂に多くの秘曲を授かりそれからはいよく琵琶に妙を得て、その名いよく高くなりしました。博雅が遠い道を、毎夜毎夜通つて三年にも及んだその熱心は、實に感心すべき事です。盲人がはじめ流泉啄木の曲を秘して、人に知らさなかつたのは、これを傳へるに足るやうな人物がなかつたので傳へなかつたのでした。そこで明月の夜、自分と共に樂しむに足るやうな人がないので嘆いてゐたのですが、その夜はからずもこの熱心な博雅を得て、遂に自分の秘してゐた曲を傳へたのでした。世の事をなす者は、この博雅の心を鏡として、つとめはげんだならば、世の中に能はぬといふ事は多くはない事です。

△熊澤蕃山

大空にそびえて見ゆる高根にも

のぼれば登る道はありけり

これはこれ、かしこくも、先帝明治天皇の御製であります。

青空高くそびえ立つた山、しかも山一面に樹は生ひしげり茨雜木は人の足をさまたげる難儀な山でも、一旦志を立て、道をえらんだならば、その頂上へ登ることも、さしたる難儀ではありません。世の中の事はすべてこの通りで、到底力に及ばぬ事と、捨てしまつたならばそれまでの事です。一旦志を立て、奮發勉勵、その方法を選んで進んだならば、やがては立派に成功して、その目的を達する事が出来ます。

更に明治天皇の御製におほせられたことがあります。そは



まさ柱たてし心を動かすな

世には嵐の吹きすさぶとも

と申す御歌であります。

一旦志を立てたからは、どこまでもそれを立ておほせるのが肝要です。

我が熊澤蕃山の如きは實に志を立て、動かす、遂にその目的を達して、更に大いに世のために公益を廣めた立派な人であります。

熊澤蕃山は、名を了介といひました。父は、もと加藤嘉明につかへてゐた野尻一利といふ人でありましたが。後に職を辭して京都に住んでゐました。蕃山は幼い時から親類の家へ子にいつてゐましたので、熊澤氏を名のつたのです。

蕃山は、幼い時に非常によく肥えて、歩くことさへ自由でない位でした。そこで一人考へますのに、

『一躰武士といふものは、一旦國家に大事があつた時には甲冑を身にまとい、武器を

手にとつて、勇ましく戰場を馳け走らなければならぬものである。それに自分ばかりの如くよく肥えてゐて、不便なことは實に甚だしい。かくては十分の働きもすることが出来ぬわけである。これは固より身體の性質にもよることであるが、幾分かこれまで安樂に暮してゐた爲めにも依るのであらう。』

と、それから後は粗末な食物をとり、衣服はなるべく薄くし、晝となく夜となく熱心に武藝を練り、又時々は野原や山へ行つて、峻しい所を越えなどし、家に居つては、夜人が寝しづまつて後、木刀をとつて庭へ出てゆき、たゞ一人槍や劍のつかひ方を練習し、かくすること數年の長い間、一日といへども怠るやうな事は無かつたといふことです。

年十六歳の時、京都所司代の板倉勝重といふ人の世話で、備前の領主池田光政に仕へる事になりました。光政は、蕃山の人となりを見て、大層よく用ひました。蕃山は二十歳の時、つら／＼考へますのに、



『今自分は備前公に仕へて、幸にも御寵愛を蒙つてゐるのは、誠に有がたい事である併しながら、かく仕事に忙がしくては、文武の道を十分修めることが出来ぬうちに年がよつてしまふやうになるかも知れぬ。只今はぐづ／＼してゐるべき時でない。』と心に決し、それから職を辭して、近江國桐原といふ所に住んでゐました。之れからは一途に書物を讀んで、日夜怠らず勉強してゐました。

或る時のこと、蕃山は、どうかしてよい師について勉強したいと思ひ、その師を求め、るために、京都へいつて見ましたが、よい學者がないものですから、失望しながら歸つて來かけました。その途中、或る所の宿屋で泊つてゐました所が、こゝではからずもよい先生のあることを知りました。それは、この同じ宿に泊つてゐた一人の旅人がありましたが、その人が蕃山に話しますには、

『さても世の中には正直な者もごさいます。私がかつて主人の用事で京都へ行きました時、草津の近邊で馬をやとつて、その馬にのりましたが、主人の金を二百兩ばかり

り預つてゐたものですから、落しては大變と思つて、馬の鞍に結びつけて置き、馬から下りる時になつて、それを忘れてしまつて、そのまゝ馬と馬子とに別れて宿につきました。夜半頃になつてから、ふとその事に氣がついて、さてはしまつた事をしました。名も知らねば所も知らぬ馬子であるから、尋ねて行くにも行かれず、固よりそんな大金は自分が償ふことも出来ず、死して主人に謝すより他は仕方がないと思ひながらも、一まづ宿の主人に相談して見ました所が、宿の主人は、『この邊のものは皆正直ですから、やがてその金は返しに來るでせうから待つて見なさい』といふものですから、自分も疑ひながら待つてゐますと、果して間もなく前の馬子がやつて來て、『歸つてから馬を洗はうと思つて鞍を解きました所が、金のはいつてゐる囊がありましたから、多分あなたのだらうと思つて持つて來ました。』といひます。私

はもう生きかへつた思ひがして大いに喜び、別に私がつてゐた金十六兩を出して禮として與へようと思つたのに、馬子は、『あなたの物をあなたに渡すのに禮を貰



ふといふ道はありません。』といつて受取りません。仕方なく半分にして八両を渡さうとしましたがそれでも受け取りません。次第次第に金高をへらして二分金にまでしましたがそれでも受けず、『それでは今夜數里の道をこゝまで来た賃として、二百文を頂きませう。』といひますから、私は今の世の中のやうに、少しでも物を多くとりたいと思ふ者の多い時節に、この馬子に限つてどうしてこんなに慾が少いのだらうと思つて、わけを尋ねました所が、その馬方が答へますのに、『私の家はもとより貧しくはありますが、我が里に中江與左衛門といふ先生があつて、この人から不當のものはみだりに取るなと教へられてゐます。』との事でした。そこで私も仕方なく二百文だけを渡して歸らせました。』

といつて、大層感心して話しました。蕃山この話の始終を聞いて、はたと膝をたゞいて、

『おゝその中江先生こそ自分の師とすべき人であらう。賤しい馬子までそれほどよく

教を守るといへば、中江先生とかいふ人はきつと學徳の高い人にちがいない。』と思つて、大いに喜んで、中江與左衛門の弟子とならうと心を定め、それからその人の村へと出てゆきました。この中江與左衛門こそ、近江聖人といはれた中江藤樹先生であつたのです。

藤樹の家をたづねていつた蕃山は、どうか弟子にして貰ふやうに頼みました所が、藤樹は、

『私は至つて、學問も淺く徳も薄く、到底人の師となる事は出来ません。』

といつて、きいてくれません。それでも蕃山は、どうかして門人になりたいと思つてその家の軒下に坐して睡らず食はずにゐること二日二夜、藤樹の母もこの有さまを見て大層可哀さうに思ひ、食物を與へてその上藤樹にその頼みをきゝ入れてやるやうにすゝめました。そこで藤樹も母の言ばにしたがつて、

『それでは先生になるなどはいへぬが、お互に勉強しよう。』



といふので、これから蕃山は藤樹について大いに勉強をしました。  
蕃山が年二十七になつた頃には、もう學問は非常に進んでゐましたが、舊主の池田侯が、その才の尋常でないのを知つて、どうかして自分にかへつてくれるやうにとの、たつての望みでしたので、蕃山は再び備前藩に仕へることになり、藩の政治にあづかつて、祿三千石をもらひました。

蕃山が再び池田侯につかへるやうになつてからは、政治の上に改革を加へて、人民の利益をはかつた事は、實に數へつくせぬ程でした。明暦元年大饑饉の起つた時には、多くの老臣の議を退けて俄に米庫を開いて多くの人を助け、或は樹を多く山に植えて早魘を防ぎ、池を掘り溝を通じ、今に至るまでその恵を蒙つてゐるものが大層多くあります。この外、藩のため人民のためにいろいろ盡した事は數限りのない程でした。

伊 藤 仁 齋

『丈夫の志たる、窮しては益々堅かるべく、老いては益々壯なるべし。』といひ、或ひは、

『斷じて之れを爲せば鬼神も之れを避く。』とは、古人のいつた言であります。

人一旦志を定めて事をなさうと思へば、如何なる困難に出逢つても、志をかへるやなう事があつてはなりません。

天は、その人に大仕事をなさしめようとするには、まづその人に艱難を與へます。この艱難に打ち勝つた者は、やがて成功の人、事業の人として世の中から敬はれます。一度艱難にあへば逢ふ度毎に志が堅くなり、元氣が盛んになる人こそ、後には立派に事をなし遂げる人です。難儀な目にあつて目的をかへたり、元氣をなくするやうな人は、到底世の競争烈しい中に立つて、學問をなし事業を遂げる



ことが出来ません。

伊藤仁齋が、貧しい暮しをしてゐながらも、遂に立派な學者となれたのは、この艱難に打ち勝つたからであります。

伊藤仁齋は京都の人でありました。家ははじめ商賣をしてゐましたが、仁齋は幼い時から、大層伶俐で、他の多くの子供とは、おのづから異なる所がありました。まだ幼かつた頃、書物の読み方を教へて貰ひましたが、この時分から、早や志を立て、成長した後には儒者となつて名をあげようと、かたく心に定めて居ました。少し大きくなつてからは、家の商業の事などは少しもかまはず、たゞ一心に書物をよんで勉強してゐました。そこで親類のものたちは皆心配して、そのまゝにしておくと家は全く亡んでしまふにちがひないと思ひ、仁齋をいまして、

『學問などをして何のやくに立つ？一體學問は支那のことで、支那では用に立つかも知れぬが、我が國では少しのやくにも立たぬ。よしや一人前の學者となつた所で、そ

れて一家の暮しをたてよゆく事は到底出来ぬ。家の商賣がきらひなれば、醫者となつて暮しをたてるがよからう。』

とすゝめました。それでも仁齋はきかず、たゞ一途に勉強をしてゐました。こんな風ですから、仁齋の家はだん／＼と貧乏して、その日その日の食へ働さへも十分は買へぬ位になりました。そこで親類のものたちは一層仁齋をときすゝめましたが、一旦立てた志をかへるやうな意志の弱い仁齋ではありませんから、少しもそれをきゝ入れず、家はたゞ貧しくなるばかりでありました。

或る年の暮れ、隣りの家では餅を買つて正月のこしらへをしてゐます。しかし仁齋の家では、餅を買ふ錢などありませんから、餅も買はずにゐました。所が仁齋の子に原藏といふ子がありましたが、隣りの家に餅を買つてゐるのを見、又隣りの家の子供たちが餅をもつてゐるのを見て、欲しくてたまりません、お母さんの傍へ出て来て、

『私もお餅を……』



といつて、頻りにせがみます。

お母さんはこの時どう思つたでせう。

『自分の家は貧しくて正月の餅さへ買へぬ。頑是ない原藏は何も知らず、隣りの子を持つてゐる餅を見ては欲しがつてせがむ。少しでも金が餘分があれば正月の餅も買つてやるし、少しは正月らしい風をさせてやりたい。併しながらこの貧しい暮しではとても出来ぬこと、おゝこの原藏がいぢらしい。』

と、心の中では泣いたでせう。

そこで仁齋のそばへ行き、

『どんなに家が貧しくても、私はまだつらいと思つた事はありませんが、原藏が何も知らずに、隣りの家の餅を見て、欲しがつてたまりません。口でこそ叱つておきましたが、心のうちが誠に可哀さうでたまりません。』

といつて、涙をこぼしました。

仁齋は机に向つて書物を讀んでゐましたが、一言もこれに答へず、無言のまゝ着てゐた粗末な羽織を脱いで、それを妻に渡しました。

妻はさつとつて、それを質において僅かばかりの金を得、これで餅を買つて子にやりました。

この時仁齋の心のうちはどうでしたらう。貧しい程つらい事はない、自分がこんなに學問をせず、商業なりをつとめて居れば、子には正月らしい風もさせ、自分たちも喜んで正月を迎へるであらうにと思つて、人知れず涙をふいた事でせう。併し、ここで志を折つてはならぬと思つて、貧しい中にも元氣を失はず、一心に學問をしてゐました。

或る日のこと、隣家のものと一緒に力を合せて、井戸を深くしました。この井戸は、隣家數軒のものが一緒に水を汲むのでしたから、仁齋はその井戸掘だと聞いて、自分も出て力を合せて仕事をしました。隣りの者どもは、



「私たちがやれば十分です。先生なんか手傳つて貰はなくてもよろしい。」  
といひましたが、仁齋は、

「いやどうも有がたう。併しながら私の家もこの井戸のお世話になるのですから、私一人かまはずにおくわけにも参りません。」

といつて、それからは皆の人々と共に井戸掘の手傳しました。

仁齋が貧しくても悲しまず志をかへず、又學問が深くても人に高ぶらなかつたのは概ねこの類でした。

後に肥後侯が、仁齋の學問と徳の高いのを聞いて、祿千石で之れを招きました。所が仁齋は、

「家に年老いた母があつて、それにつかへるものが少うございますから、たとひ河程の祿を頂いても参ることは出来ません。」  
といつて、遂に行かなかつたといふことです。

こんな風でしたから、年六十になつても、家は大層貧しかつたといふことです。仁齋の學徳の高いことは、最早天下にかくれなくなつて、その門に入るものが日々絶えず、日本全國で仁齋の門人のなかつたのは、たゞ飛彈と佐渡と壹岐との三ヶ國だけだつたといひます。

### ▲豊臣秀吉

梯もなくて天井へ上らうとする人があれば、その人の望は無理といはなければなりません。『志を立つるは大にして高きを欲す。』とは貝原益軒の言で、志が小さければ小成に安んじて大業は出来上らぬからいつたのですが、いかに志が大であつても、この大なる志に向つて奮發勉勵して行かなければなりません。しかしながら大なる志も必要ですが、それに到着するまでには小さな事もやつて行かねばなりません、即ち高い天井へ上るには低い階段もふまなければならず、



高い山へ登るには低い麓をまづ踏まなければなりません。  
 豊太閣秀吉が、信長の草履をつかんだ手で遂には天下の英雄をしたがへてしまひなほその上外國にまでも日本の國威をかやかしたといふのは、全く志が大きかつたのと、階段をふみあやまらず昇つたからであります。若し秀吉が「草履取のやうなつまらぬ事はせぬ。」といつて、なまけてゐたらどうでせう、きつとあのやうな立身はしなかつたでせう。秀吉について少年諸君の最も學ばねばならぬ所はそこにあるのです。  
 豊臣秀吉は尾張國中村といふ所で生れました。父は彌右衛門といつて百姓をしてゐましたが、長らく子がなかつたので、日吉權現といふ神様へ願を懸けて毎夜參つてゐますと、ある夜おかあさんが、太陽が懐にはいつたといふ夢を見ましたが、それから身もちとなつて、やがてこの秀吉が生れたのでした。両親は大喜びで、  
 『これはきつと日吉權現さまが願をおきゝ入れ下さつたのだ。』

といふので、日吉丸といふ名をつけました、秀吉が生れたのは天文五年正月元日朝の六時頃、朝日がきら／＼と東の山から出る頃だつたといひます。  
 所が父の彌右衛門は病氣でなくなりましたから、たゞさへ貧しい家は一層貧しくなつて食ふものも食へぬやうになつたので、母は筑阿彌といふ人の許へ再び縁づきましたしかしこの家もあまり勝手のよい暮しではなかつたので、日吉丸はお寺へ預けられて子僧となりました。所が日吉丸はその頃から、坊さんになるのはきらひで、勇ましい事が好きでしたから、お經は大のきらひで、毎日和尚さんの目をぬすんで戦事などして遊んでゐます。そのうち日吉丸は、  
 『こんな所には到底立派なものになれぬし、又自分の好きな學問も出來ぬ。』  
 と思つたので遂にこの寺をにげて出てしまひました。  
 一旦は自分の家へ歸つたものゝ、又もコツソリ家を出て遠江の方へとやつて參りました。濱松の近くまで來ると、折柄通りかゝつた松下嘉兵衛といふ武士が日吉丸の顔を



見て、その猿に似たのををかしく思ひ、いろ／＼尋ねてゐますと、如何にもしつかりした物のいひぶりに感心して、

『おれのうちに奉公して見る氣はないか。』  
と云ひました。日吉丸は、

『かねてよい主人につかへたいと思つて探してゐました。どうか奉公させて下さい。』  
と頼んだので、こゝに日吉丸は松下嘉兵衛の家へいつて奉公する事になりました。

さてそれからといふものは日夜骨身をします働きをしました。元來伶俐なたちの日吉丸はかげひななくよく主人のために動きましたので、主人の信用も追々厚くなり、はじめは水汲から草履取、仲間、玄關番とだん／＼出世して、遂には衣服や道具の出入をする役となりました。新しく来た日吉丸がこんなにだん／＼と出世するものですか。松下のけらいの中に日吉丸を憎むものがあつて、いろ／＼と主人に讒言をします。嘉兵衛はよくわけを知つてゐますが、

『このやうな所に日吉丸をおいておくのは本人のためにならぬ、惜しい家來だが行末見込のある者だから何とかしてやらねばなるまい。』  
と思つて、日吉丸をさとして歸らしました。

それから一旦自分の家へ歸つて、誰れかよい主人はないかと考へてゐますうち、ふと思ひついたのは、この頃尾張の清洲の城主織田信長の武勇の譽のあることでした。これこそよい主人と思つて、早速清洲へいつて奉公の事を頼みました所が、遂に草履取として奉公することが出来ました。

この頃秀吉は木下藤吉郎といつてゐましたが、嘉兵衛の家にゐる時と同じくよく働きしました。信長が夜の明けぬ頃に俄に外へ出る時などでも、

『誰れか居らぬか。』

といふと、他の者はみんな睡入つて返事もせぬのに、藤吉郎は唯一人聲に應じて返事をして出て来たといひます。友だちなどが睡つてゐる時でさへも、藤吉郎はいつ用が



あるかもわからぬと思つて、かくは眼をさましてゐたのです。如何に藤吉郎が身分低い仕事にも忠實につとめたかといふことは、この話でもわかります。かくて信長の信用はだん／＼とあつくなつて來ました。

或る時のこと、清洲の城の扉を直してゐるのを見て、役人たちの仕事をはかどらすのが如何にもまだるいを見て、

『この騒がしい世の中に、城を普請するのはあんなにぐず／＼してゐては實にあぶない事だ。』

と嘆いてゐましたのが、はからずも役人の耳に入つて、

『已れ身分の低い奴が生意氣な事をいふ。』

と、早速その由を信長に告げました。信長は、

『藤吉郎のいふことなら、或ひは何か譯があるだらう。』

といつて、これからその普請を監督する役人にしました。藤吉郎は早速人夫を各組に

わけて、その組々に普請の受持を定めて競争させてやらしたものですから、實に早く出來上つてしまひました。こゝに於て信長はじめ同じ家來の者たちははじめて藤吉郎の賢いのにびつくりしました。

かくて藤吉郎秀吉は追々と出世し、遂には一方の大將とせられて、信長の命を受けて諸方を征伐しましたが、行く所で皆立派な手柄をたてました。そのうち秀吉は信長が死んだあとを受けて、遂に天下を一統するやうになつたのです。

### ▲ 徳川家康

『衣食足つて禮節を知る。』とは、古人の格言で、衣食が足らぬ時には、父母にかへて孝行をしようと思つても出來ず、一家の者を養つて行くにも困難を感じ、或ひは公益をはかる事や、友だちに義理を缺くことなども出來て來るものです、如何によく働いて職業につとめた所で、節儉を守らなかつたならば、苦心して得



た所のものも直ぐになくなつてしまふより仕方ありません。身を立て志を遂げようとするものが奢侈にふけるやうでは、到底その事は成らず、一家を治めて行かうとするものが、節儉を守らなかつたならば、その家は遂に亡ぶより外ありません。一身一家がその通りであるばかりでなく、一國に於ても亦その通りで、國民が奢侈にふけるやうでは、その國は遂に滅亡してしまふより外ありません。それですから、身を立て家を治めようとするものは、片時もこの節儉を忘れてはなりません。たいよく注意すべきは、節儉が過ぎて吝嗇におち入らざるやうにすべきことです。

身を一小國からおこして、遂には天下の兵馬の權をにぎり、徳川氏十五代三百年間の基を開いた徳川家康は實に節儉を守つた人でありました。將軍職を子の秀忠にゆづつて、身は駿河の府中(今の静岡)に隠居してゐましたが、普通の人なれば、身は功なつて隠居してゐるのですから、安樂に贅澤をつくして餘命

を送るのですが、流石徳川幕府の基を開いただけの人で、苟も奢侈に流れるやうな事はありませんでした。或る日のこと、そばにつかへてゐる一人の臣が、美しい袴をばいて出て来ました。家康がその名をたづねますと、茶宇といふものですと答へました。そこで家康は甚だ不機嫌な顔をして、

『お前はまだ名も知られてゐないやうな身分でありながら、そんな美しい袴をつけるといふのは、實に不都合である。數年前までは、天下が亂れて戦の止むことなく、百姓は非常に苦しんでゐたのが、今ややく天下が治まつて来たのであるから、身を慎しみ儉約を守らねばならぬのに、早やもそんなに奢りに流れるとは、實に不届者である。左様なものはこゝにおく事が出来ぬ。』

といつて、非常に叱つていつて聞かせました。

又或る時、その妻英勝院が、家康に向つていひますには、

『あなたは常に洗濯した着物をお召しになります、女中たちはお召物を洗濯する度



に手を摩りむいて血を出し、大層苦しげに見うけます。これから後は、垢のついた着物は下々の者におつかはしになり、新しいのをお召しになつてはどうです。』

と申しました。すると家康は、

『よく考へて見よ、この府中の倉の中にある着物だけでも非常にたくさんな物で、この外京都や大阪にある倉の中にも、着物やその他のものは幾らもあつて、自分一人で一日に着物を幾百枚用ひた所が左程の不足を告げぬ。併しながら、下々の民どもが苦しんでゐるのをかまはず、奢りをきはめたならば、どうしてこの世を保つて行く事が出来よう。上の者も下の者も儉約をこそ第一にすべきである。』

といつて、諭したといふことです。

これより前、家康が濱松城にゐた時、或る日非常に寒い事がありました。そこで側につかへてゐた醫者の、近藤縫殿といふ者が、一枚の外套をもつて來ました。その外套は、かつて豊臣秀吉から贈つたもので、紅梅に鶴の模様をついた、見るからに美々し

く派出やかなものでした。これを見た家康は、

『そんな美々しいものは持つて來なくてもよい。その外套は、かつて關白殿から貰つたものであるから、豊臣家に對して已むを得ず一度は着たことがあるが、そんなものは再びと着るものでないそのために我が家の質素な風を破るやうな事があつてはならぬ。』

といつて、他の外套を持つて來させて着たといふ事です。

### ▲丸山應舉

昔の人はいつてゐます。

『左の手で圓形を書き、右の手で四角形を書かうと思つて、同時に手を動かす時は、圓も四角も両方ともうまく書けぬ。』

と。又偉人リンコルンは常に、



『多くのことをなす秘訣は、一時にたい一事をなすにあり。』  
といひました。

一時に多くの事をしようと思ふ時は、心が専らその方に注がれず、遂にはいづれも失敗に終るといふ事は多くあるものです。

事をなさうと思ふものは、よろしく或る一事をえらんで、一意専心そのことにつとめるのが肝要です。

丸山應舉は京都の人で、名を仲選といつてゐました。生れつき大層書が好きで、後には名高い畫家となり、今でもこの人のかいた書は非常に價が高く、人々が珍重する所であります。

或る時應舉は、

『畫かきにならうと思ふに、人物、風景、動物、植物など、すべての畫に上達しようと思つた所で、一生力をつくしても、皆その妙をきはめるといふ事は到底出來が

たい事である。これは一つ一番自分の好きなものを選んで、それに最も力をつくすのに限る。』

と考へて、それからは鶏と狗子とを畫くことに最も骨を折つて見ようと決心しました。

そこで先づ鶏をかかうと思つて、鶏が水を飲むさま、餌をついばむ様子、鳴く時の工合から、羽をひろげたり啄で羽をなでる時の態度などをよく研究して見て、餘程鶏をかくのに上達しましたが、まだくその運動する様子や、鶏の心もちなどが十分わからぬので、それから毎日毎日祇園の社へいつて、その境内に澤山飼つてある鶏の様子を熱心にみつめて動きませんでした。祇園の社へ参る人たちは、いつ参つても、應舉がつくねんとして鶏のそばに立つてゐるものですから、それを見て馬鹿者だとはかり思つて、互に指さしてあざけり笑つてゐました。熱心な應舉は、そんな事には少しも頓着せず、毎日毎日その通りにすること二三年にもなつて、或る日大いに



得る所がありました、そこで應舉は家へ歸つて掩障に鶏を書いて見ました。そのうま  
く書けたことは前よりも一段と見ばえがあつて、まるで實際の生きた鶏そのまゝであ  
りました。そこでその鶏をかいた掩障を祇園の社へ奉納しました。それを見る人々は  
その上手なのに皆々感心してゐました。

應舉は、人々がその書を見てどんな批評をするであらうと思つて、毎日門人を祇園の  
社へ行つて、その評を聞かしてゐました。所が或る日のこと、一人の野菜賣りが、そ  
の掩障の前に立つて、暫くそれを見てゐましたが、やがて獨りごとをいつて、  
『中々よく出来てゐる書だ。ことに鶏の傍に草のかいてないのは最もよい。』  
といひながら、そこを去つて行きました。これを聞いてゐた應舉の門人は、この野菜  
賣りのあとをつけて行きました所が、やがて東洞院にいつて、一つの露路にはいりま  
した。門人はすぐに歸つて、この由應舉につげますと、應舉は翌日酒と肴を手にもつ  
て、その野菜賣りの家をたづねて行きました。

さて應舉は言ばを丁寧にして、そのわけを教へて貰ふやうに頼みました所が、野菜賣  
りは、  
『いや之れはどうも恐れ入ります。私風情のものが書の事などは少しも知りません  
が、前に私は鶏を飼つてゐた事があるものですから、鶏の羽の色が時によつて少  
し變ることがあるのを知つてゐました。昨日祇園の社であの掩障を拜見しました所  
あの鶏の羽の色は冬の色で、中々上手に出来てゐましたから、その傍に草のかいて  
なかつたのを感じして、獨言をいつたまでの事です。』  
といひました。そこで應舉はあつく禮をいつて歸り、それから鶏の羽の色が四季によ  
つてちがつてゐるのをさと、愈々鶏の書に妙をえ、遂に應舉の鶏といつて名高いも  
のとなりました。

應舉が、かつて人から、臥してゐる猪の圖を書いてくれと頼まれた事がありました。  
所が應舉はこれまでに猪の臥てゐるのを見た事がありませんでした。そこへ八瀬とい



ふ所から一人の薪賣りの婆さんが來ました。そこで應舉は、

『お前は猪が臥てゐるのを見た事があるか。』

と尋ねますと、

『時々山の中で見ることがあります。』

と婆さんが答へました。應舉はわけを話して、

『今度若し猪の臥てゐるのを見た事があつたら、どうか直ぐに走つて來て知らせてく

れ。相當のお禮をするから。』

と申しました。

さて一月ばかりもたつて、前の婆さんがやつて來て、

『私の家の後の藪の中に、一匹の猪が來てやがて臥ました。早く來てごらんなさ

い。』

といふものですから、應舉は直ぐに筆や紙や墨など用意して、八瀬の婆さんの家まで

行きました。見ると果して一匹の野猪がねてゐます。直ぐに紙をのばし筆をとり、よくその様子をうつして後、婆さんには厚く禮をして、家へ歸つてそれを清書しました。

或る時のこと、鞍馬から一人の翁が來ましたので、應舉は、

『あなたは臥てゐる猪を見ることがありますか。』

と尋ねました。するとその翁は、

『見たことがあります。』

といひますから、應舉は自分がかいた臥猪の圖を出して來て見せますと、翁は暫くそれを見て、

『書は見事にかけてゐますが、この野猪は臥てゐるのではなくて、病氣してゐるのです。』

といひます。應舉は驚いてそのわけを問ひますと、



『健かな野猪は、臥てゐる時にはその背の毛が立つてゐて、四本の足は折りかがめてゐます。私はかつて山の中で病氣にかゝつて臥てゐる野猪を見ましたが、この鬣の通り毛は立つて居らず、四本の足はこの通り伸ばしてゐました。』  
といひましたから、應擧は大いに悟つて、再び書をかき直しました。  
二三日してから、八瀬の薪賣りの婆さんがやつて来て、  
『あの野猪はそこで死んでゐました。』  
といつたといふ事です。

應擧が心を専らにして、一途に書をかくことにつとめ、人の言ばを聞いて自分のわるい所をあらため、或ひはそれによつて大いに研究をしたのは、大層感心すべきことです。

何事にかぎらず、自分の缺點をいはれると直ぐに怒り、賞められさへすれば喜ぶといふやうな人は、決して立派な人となることは出来ません。

△小川泰山

少年老い易く學成り難し

一寸の光陰軽んず可からず

未だ覺めず池塘春草の夢

階前の梧葉既に秋聲

おそいやうで早いのは月日のたつことでもあります。三百六十五日といへば随分長いやうでも、梅の花に鶯がないたり、櫻の花が咲き匂うてゐるかと思ふと直ぐに雪ふる冬となつてしまひます。つい此の間まで子供であつた者が、すぐ大人となり、まだ若い人だと思つてゐるといつの間にもやう頭に白髪が多い老人となる實にこの世の中は夢のやうです、夢のやうな世の中だからといつて、夢見てゐるやうに暮してゐた時には、何事もせず世のためになることもなく、夢のやうに生



れて夢のやうに死なねばなりません、何のなすこともなく、夢のやうに暮してこの世に生れて出たかひがありませんか、萬物の靈長だと威張られるだけの價値がありませんか。

人と生れて世の中に出て来た限り、大いに立派な人となつて、世の爲めにつくす所がなければなりません、而しながら、幼い時から勤めてをかなければ、何時の間にか年がよつてしまひます。勉強しようと思ふ者は、よろしく幼い時から一心に勉めはげむのが肝要であります。

昔、江戸に小川泰山といふ人がありました。この人は名を信成といつて、幼い時から大層學問が好きでした。それですから、遊びたはむれてゐる時にも筆や墨をもてあそび、少しの紙ぎれでもあれば直ぐにそれを書き書いてゐました。こんな風でしたから五六歳になつた頃には、どうやらかうやら、字の形がわかつて、讀むことの出来るやうなものを書いてゐました。

或る時のこと、松山敬和といふ書家が、泰山を見て感心して、

『この兒はきつと世の常の子でない、世間の子供よりもすぐれた書才がある。』

といつて、支那の司馬温公といふ人のかいた、勸學の文を書いて、それを泰山に與へました。これを貰つた泰山は大いに喜んで、いつもそれを寫したり讀んだりして怠りませんでした。

その文のわけが、どうやら分つて來かけますと、泰山は、書物を讀むのは大層益のあることだといふ事をさとりました。そこでいよいよ學問をやらなければならぬといふ志を立てました。これが泰山が七歳の時のことでした。

親として、自分の子の賢い事ほど嬉しいことはありません。泰山のお父さんやお母さんは、泰山がかくも幼い時から學問に心を入れるのを見て、どんなにうれしく思つたかわかりません。そこで山本北山といふ先生のうちへ通はしまして、勉強する事にきめました。



泰山が先生の家へ通つたことは、それは／＼實に熱心なもので、如何に大雨がふつても、如何に大風がふいても、その他どんな事があつても未だかつて休んだといふやうな事はありませんでした。

或る時のこと、大雪がふつて、道を歩くには實に難儀なことになりました。その朝も泰山はいつもの通り先生の許へ通はうとしますから、お父さんやお母さんも心配して休んでもよからうといひましたが、泰山はききません。遂に大きな笠をきて、風にまじつて雪がふる中を、足をうづめる雪ふみながら出て行きました。所が何をいふにも子供のことでですから、道を半分ばかりも行くと、手足はこゝえるし雪はつもるし、とう／＼たふれてしまひました。

そこへ一人の男の人が来て、それを助けおこして家へ歸らさうとしましたが、それでも尙泰山はきかず、遂に又も足をはこばせて先生のうちへいつて勉強しました。

泰山が少し大きくなつた頃には、學問も大層すゝんで多くの書物を読み、他の人の知

らぬ事まで多く知つてゐました。又むつかしい書物に出あつて、わからぬやうな事がありますと、そのまゝそれを捨てゝおくやうな事はなく、如何なる辛苦をしてもそれをわからさずには置かなかつたといふことです。かういふ風ですから、年々若ければ

泰山の學問の深いのを感心せぬ學者は一人もありませんでした。

不幸にも、この年若い學者は、天明五年に年十七歳で死んでしまひました。その息が絶えてしまふ時まで、書物をもつて離さなかつたといふことです。

僅か十七歳にもならぬ頃に、世の學者から尊敬せられるやうな人になつてゐたといふからには、如何に泰山が學問に深く心をよせて勉めはげんだかといふ事が思ひおこされまゝです。

徳川光圀

身は天下の副將軍として、飛ぶ鳥をもおとさんばかりの勢をもちながら、しかも



高ぶらず奢らず、儉約もつて下ををさめ、徳川幕府と骨肉の關係をもちながらも大儀名分を明かにして尊王の氣風を鼓吹し、老いては西山に閑居して百姓と共に

鍬を手にして談笑した人こそ徳川光圀その人であります。

少しく家が豊かになれば直ぐに美衣美食を好んで奢りに流れるのは世の人の常であります。しかしながら苟も身を立て家をおこそうとするものが奢りに流れるやうでは、到底その目的は達せられません。又上に立つものが奢侈を好むやうでは下々のものは自然質素儉約を守らぬやうになります。

實に徳川光圀は、身は徳川の副將軍として位高きにながらよく儉約を守つた人でしたが、たゞにその點に於て手本とすべきのみならず、種々かみとすべき行ひがありました。

徳川家康の十一番目の子に頼房といふ人がありました。光圀はこの頼房の子です。立派な家に生れてゐながら、幼い時から、家來の三木之次といふ人の家に預けられまし

た。これは頼房公が、御殿の内にて育てたら、氣儘になつたり、或ひは柔弱になつたりしてはならぬと思つたから、家來に頼んでその家で養つて貰ふことにしたのです。光圀が四つの時、家の前で多くの子供たちと一緒に遊んでゐますと、その中の一人の子供が、

『やあ天狗坊主が来た。天狗坊主だ〜。』

といひました。見ると一人の坊さんが来てゐます。この坊さんは不思議によく人相を見るので、皆のものが天狗さんが坊主に化けてゐるのだといつて、天狗坊主といつてゐたのださうです。この坊さんが子供の遊んでゐる所へ来て、光圀の様子をつつくゝながめて、

『どうもあの子一人だけは餘程ちがつた所がある。まるで多くの鶏がゐる中に、一羽の鶴がまじつてゐるやうなものである。』

と獨言をいつて、大層感心してゐたといふ事です。後々に立派な人になるやうなもの



は、子供の時から、する事言ふ事が、どことなく違つてゐたのでせう。  
 三木の家にゐました時に、光圀の側について守をしてゐた女中に、小督といふ人があ  
 りました。或る冬のこと、白鳥の羽か綿かと思ふやうな、眞白な雪がちらちらと降つ  
 て来て冬の枯れ木も時ならぬ花を咲かして、まことに美しい景色となりました。光圀  
 はこの雪景色を見てゐましたが、暫くして、

降る雪が白粉ならばとり上げて

小督の顔にぬりたくぞある。

といふ歌をよみました。これが六歳の時のことです。その頃から如何にかしこく、又  
 如何に優しい心をもつてゐたかといふ事がおしはかられます。

頼房公は多くの男の子をもつてゐましたが、まだ後つぎを定めてゐませんでした。そ  
 の時の將軍の家光公がこれを心配して、江戸のお屋敷につとめてゐる水戸の家老の中  
 山信吉といふ人に、

『水戸へまいつて、どの子が一番世嗣によいか選んで来い。』  
 と、いひつけました。

中山信吉は、早速水戸へいつて、頼房の子たちに出逢ひましたが、誰れも皆、何だか恐ろ  
 しさうな顔をしたお爺さんが来たといふ風で、だまつて見てばかりゐましたが、光圀は  
 信吉が来たといふことを知りますと、直ぐにお盆の上に干飯をのせて持つて出て、

『爺や、これでも食べて何か江戸の話をしてくれないか。』  
 と、親切さうに、こゝししながら申しました。

信吉は大層喜んで、

『あゝ、これが誠にお世つぎにふさはしい若君か。』

といつて、光圀を抱き上げて、嬉し涙をながしたといふことです。これも矢張り光圀  
 が六つの時の事です。

この話を聞いて、家光公も頼房公も大いに喜んで、光圀を水戸家のあとつぎと定めま



した。

それから光圀は七つの年に、江戸の屋敷で住むことになりました。屋敷は小石川にあつたのです。

江戸小石川の屋敷から五丁ばかり離れた所に、櫻の馬場といつて、罪人の首を斬る所がありました。或る日のこと、光圀の父と共にこゝへいつて、罪人が首を斬られるのを見たことがありました。これらの首は斬られて後、獄門といつて、門のやうなものの上にさらしておかれるのです。その夜、頼房は自分の子を試して見ようと思つて、『誰れか今から櫻の馬場へいつて、獄門に上げてある首をとつて来るものはないか。』と申しました。そこにゐた子たちや、家來のものは、これを聞いて、たゞ顔を見せ胸をどきつかせるばかりで、誰れ一人として行かうといふものはありません。その時光圀は、『お父さま、私が行つて参ります。』

と、今年七つの光圀が、ちつとも恐ろしがる風もなく申しましたので、頼房は大層よろこんで、

『それではいつて来い。』

といひながら、自分の大切にしておいた短刀をかりました。

一體櫻の馬場といふ所は、今でこそ町になつてゐますが、その頃はごく淋しい所で、古い木などが澤山しげつて晝なほ暗い所であつたのです。

暗さは暗い眞の闇で一寸先も見えず、時々ざつと吹く風は木の上を渡つて、そのあひまゝには誰れかがくすくす泣いてゐるのではないかと思ふやうな音がして、身の毛がぞつとして立つやうな所を、七つになつた幼い光圀はすたくと歩いて獄門の所へ來、手さぐりに首をさがして引きすりおとし、持つて歸りかけましたが、あまり重いので、刀でその首の頭髪だけ切りおとし、それを證據にもつて歸りました。お屋敷では、父の頼房はじめ多くの家來たちは、光圀の身の上を心配をしてゐますと



そこへ血だらけになつた手に、髪の毛をもつて歸つて來ましたので、皆のものは大層びつくりし、その元氣で膽力のあるのを感じました。

又十二の時に、江戸の大川の淺草川、今は隅田川といつてゐますが、この廣い川をおよいで横ざり、お父さんから三條小鍛冶宗近の名刀を御褒美に貰つたといふ事です。光圀は十六七才の頃から、色々な書物を勉強しましたが、支那の史記といふ歴史の本をよんで、

『支那にはかういふよい歴史の本があるが、日本にはまだかういふ風の本は一つもない。どうかして日本の國にも、こんな書物をこしらへて見たいものである。』

と思つて、一生懸命に勉強し、それから小石川の屋敷に、彰考館といふのを建て、こゝに天下の名高い學者を呼び集めて、長い間の苦心の後に、大日本史といふ立派な歴史の本をこしらへました。

この頃に楠公が討死した湊川には、草が澤山生え繁つてゐて、墓らしい墓もなく、折

角君のため國のために忠義をつくした臣が死んだあとであるのに、かくも荒れはてた有様になつてゐるのは、實になげかほしい事だと思ひ、どうかしてその討死にの場所に、立派な石碑をたてようとし、家來の佐々木介三郎といふ人を湊川へやつて土地の様子をしらべさせ、自分で書いた『嗚呼忠臣楠氏之墓』といふ八字をほりつけた石碑を建てました。今はこゝに湊川神社といふ立派な社がたてられて、毎日々々引きもきらず、大勢の參詣人があります。

この光圀公は、三十七萬石の大きな大名で、紀伊尾張と共に、徳川御三家の一としてその勢は實に大したものだったので、少しも奢るやうな事はなく、大層儉約をされました。

或る時、原忠右衛門といふ家來がやつて來ました時に、

『久しぶりだから、何か馳走をこしらへて食べささうか。』

といつて、冷麥といつて素麵のやうなものを、自分がでに打つてこしらへて出したと



いふことです、又、小石川のお屋敷につかへてゐた澤山の女中たちが、紙を粗末に使つて仕方がないものですから、或る冬の最中、女中どもを連れて紙すき場へ行き、多くの職人が紙をこしらへる有様を見せました。女中どもは毎日火にあたつたり、たくさんを着物を着たりしてゐるものですから、たゞ川端の風が吹く所に立つて見てゐるだけでさへも、ぶる／＼ふるふ程寒くて仕方がありません。それに紙をすいてゐる女たちは、皆裾を高くからげて、身を切るやうな寒い風が吹いてゐる時に、つめたい水の中へ跣のまゝではいつて行きます。

この時光圀は女中どもに向つて、

『一枚の紙でも、皆あの通り骨をつて捨へるのだ。寒い目をこらへて働いてゐるあの有様を見ても、半枚の紙でも粗末につかつてはならぬといふ事がわかるであらう。

これから紙を使ふ度に、あの職人たちの辛苦を思ひ出すがよい。』

といつて聞かせました。これから女中どもは皆紙を大切に使ふやうになつたといふこ

とです。

こんなに下々のものに紙を大切にせよといつただけでなく、自分も亦大層紙を大切に使ひ、少しの紙ぎれや反古紙でも、むだに捨てるやうなことはしませんでした。

光圀は年がよつてから、水戸から五里ばかりも北の、西山といふ所へ隠居して、こゝで安樂に世をおくりました。こゝへ隠居してからは、畑へいつて鍬をふり上げて仕事をしますし、近所の百姓たちともなれ／＼しく話しあつて、これがかつて天下の副將軍、右近衛中將、從三位水戸中納言とはまるで思はれぬ位だつたといふことです。しかし百姓のことはかりしてゐたのではなく、年がよつてからも學問に怠らず、又人を助け救つたことも澤山ありました。

光圀は常々下のものにつきのことをいつて聞かせてゐました。

『人は上のものから下々の人民に至るまで、節儉を守るのが第一である。只今は天下が安らかに治まつてゐて、上のものも下のものも皆泰平になれて、奢侈を好むやう



になり、衣服から飲み食ひの物、家やら諸道具に至るまで、皆我れ一と美しいものを用ひるやうになつて来た。それであるから、國の方も家の方も共々に費用が多くて困るやうになつた。これは上の者が富貴の家に育てられて、榮耀榮華をして暮した習慣が付き、節儉に意を注がないから、その風が自然と下々のものに及んで来たのである。殊に下のものが上に諂つて我れ一と美しいものを献上したり、或ひは上役のものやお側付の臣にまで種々お髭の塵を拂つたりなどする悪い風がある。こんな風が行はれるから、國家はますます窮乏して行くのである。そのみならず、種々な風をおこして諸國にその費用を割り當て、國主はその費用のために多くの金を捨て、なほ足らぬ時には下々人民の財を出させてこれに當てるから、國家はいよいよ窮乏するより外はない。泰平が長く續いた果てがかくなることは、昔から何處の國でも同じことである。されば人々は誰れしも節儉を守るのが第一である。人々が節儉を守つた時には、親戚や朋友を助けることも出来るし、子孫を教育することも出来る

來れば又世のために益あることも出来る。たゞ々々吝嗇に陥らぬやうに氣をつけるのが肝要である。』  
と。光圀は遂に元祿十三年十二月といふになくなりました。水戸の常盤神社には、この光圀公が祭つてあります。

△ 城 保 巳

風一陣、講義の席の燈火は消えて眞の闇、弟子どもは書物を見ることが出来ず、困つてゐた時、

『さても目のある人は不自由なものかな。』

と笑ひ、

番町で目あき盲にものを問ひ

とうたはれた大學者こそ、盲でありながらも目あきにまさつて世を益した城保巳



一でありませう。

生れてから問もなく目を失つてゐながらも、一旦志を立て、勵んだ末は、遂に後の世までも名を残すやうな立派な人となれました。何不自由もない立派な身をもつてゐながら、碌々事もなさずに死んでしまふ人は、この塙保己一のことを思つても實に生きがひのない極みであります。

塙保己一は武藏國保木野村といふ片田舎の百姓の家に生れ、小さい時の名を寅之助と呼んでゐました。兩親から大層可愛がつて育て、貫つてゐました所が、五歳の時に、肝の病にかゝり、いくら手をつくして介抱しても病氣はなほらず、二年の間苦しんで遂にめくらとなつてしまひました。眼の見える頃には、野原や庭さきで美しい花を摘んだり、美しい石を拾つたりして遊んでゐたのですが、今は全くの目くらとなつてしまつて、何一つ見る事が出来なくなつてしまひました。保己一はどんなに淋しく悲しく思つた事でせう。

だん／＼大きくなつてゐるうちに、十二歳の時にお母さんがなくなつてしまひました。

寶曆十年の三月、保己一は十五になつてゐましたが、父の許をうけて保木野村を出で江戸の方へと出て行きました。着物などは皆一つの素箱に入れて、これを負ひ、一本の杖をたよりに道をさぐりながら、一人の絹商人と道づれになつて、お互に出世しよう名をあげようと物語りしながら江戸へ着きました。この絹商人は、後に根岸肥前守といふ町奉行になつた人です。

保己一は江戸へついてから、兩富檢校須賀一といふ人の弟子となつて、名を千彌とかへて、按摩、鍼、琵琶、三味線などの稽古をしかけました。

しかしながら、千彌の心はこれとちがつて、學問がしたいとばかり考へてゐますから歌の文句などは一度きけば決して忘れるやうな事はありませんが、按摩やら鍼やら琵琶などといふものは、一向に上手になりません。けれども醫者の書物などは、一度教



へて貰へば、明日はもう一字一句もまちがへずに讀める程、物おぼえがよろしかつたのです。そこで先生の雨宮檢校は、千彌をよびよせて、

『お前も折角遠い所をはる／＼と江戸までやつて來たのであるが、今だに教へてやることは少しも上達せぬ。それでこれから三年ほどの間はお前を養つてやるから、お前の思ふことをやつて勉強して見なさい。若し三年たつて、何も出來ないやうな事なれば、致し方がないから故郷へ歸ることにするがよろしい。』

といつて聞かせました。』  
それから保己は一心に學問をしようと思ひ、十六歳の時に、萩原宗固といふ學者の弟子となりました。その間熱心に勉強して、少しの間も油断なく學問にはげんだおかげで、二十才ぐらゐになつた頃には、もう一かどの學者になつてゐました。しかし元から病身で、からだが大層弱かつたものですから、先生の雨宮檢校は五兩の金を與へて、氣保養に旅にでも出ていつて、金がなくなつたら歸つて來るがよからうと申しま

した。

そこで保己一は、先生の仰を有りがたく受けて、一旦國元へかへつてお父さんと共に伊勢へまゐり、それからあちらこちらと旅して歩きました。まづ京都へいつて、お父さんに手を引かれながら説明して貰つて祇園、清水、大佛、三十三間堂などを通つて北野の天満宮までやつて來ました。こゝで日頃から慕つてゐる菅原道真公に出逢つたやうな氣がして、ひたすら我が身の學問を仕とげさせ給へと祈つて、これを一生の守り神様ときめました。

こゝを立ち出で、大阪へ行き、住吉、天王寺などを伏しをがみ、それから播州路へといつて須磨、明石の清い濱邊に旅の憂をなぐさめ、それから引きかへして紀州の高野山や粉川寺ををがみ、大和の方へとは入つて行きました。

頃しも春の彌生でありましたから、花の下に一夜の宿をからうと思ひ、吉野山にわけ入つて西行庵に休み、お父さんが涙を流しながら話して聞かせる花の景色を心の目で



見てゐました。

盛りにはいづれをそれと白雲の

かゝるも匂ふみよしの花

といふ歌は、こゝで保己一がよんだ歌なのです。

かくて六十日あまりの旅をすまして、再び先生の雨富檢校の家へ歸つた頃には、うれしい事に病はもうすつかりなほつてゐました。それから保己一は國文學に名高い加茂眞淵といふ先生の弟子になりました。この先生は本居宣長や平田篤胤などと共に、國學の四大家といはれた程の大學者でしたから、保己一は一心につとめて強勉したので大層學問が進みました。半年ばかりして、この加茂眞淵はなくなりましたが、その後保己一は天満宮に祈願をして、朝は火の物をたち、毎日心經百卷をよんだ、千日たつたら勾當の位に進ませて下さいと申しのべ、これからは一層熱心に強勉をしてゐました。そのおかげと、先生の雨富檢校の盡力とで、安永四年正月元日に、年三十で勾

當の位にのぼりました。勾當といふのは盲の位の一つで、檢校の位のつぎでありま

す。保己一は盲の身でありながら、一心に勉強して、書物をこしらへる事にも骨を折りました。

この頃、保己一の學問の深いのを慕うて、あちらこちらからその門人となつて勉強したいといふ者が澤山來ました。三十四歳の時に、麴町に席を開いて、ここで澤山の弟子に書物の講義をしました。

或る時、保己一が源氏物語の講義をしてゐますと、風が吹いて來て火が消えましたので、弟子どもは、

「先生、火が消えましたから一寸待つて下さい。」

といひますと、保己一は笑ひながら、

「どうも目のある人は不自由なものだなア。」



といつたといふことです。

保己一は勉強のおかげで、その後又檢校といふ位に進みました。

それから保己一は、世の人のためになる書物を一心にこしらへました。その中の群書類従といふ本は、正篇が一千二百七十部、つゞきが一千八百部、兩方で三千七十部といふ大きなものです。盲でありながら、これ程までの大學者となつたのは、ひとへに保己一が苦心のたまものです。文政五年に七十七でなくなりました。

△山崎闇齋

先祖の光消さじと思ふにも

富を願はぬ人あらめやは

子孫のその末かけて思ふには

富せんことぞまづ願はしき

げにこの心こそ世の常の人の心です。誰れでも貧しいよりも富み榮えてゐるのを喜び、貧しい家に生れたよりも富んだ家に生れたのを幸福とするのは人情です。こゝに卑しく貧しき家に生れたのを唯一の樂しみとし、遂には身を立て名をあげた大學者があります。山崎闇齋こそ實にその人なのであります。

山崎闇齋は京都の人で、通稱を嘉右衛門、名は嘉、字は敬義といつてゐました。闇齋及び垂加はその號であります。

闇齋は幼い時大層亂暴だったので、妙心寺といふ寺へ入れて僧とせられました。後に土佐の吸江寺にいつて學問をしてゐました所が、野中兼山などいふ學者たちにすゝめられて、遂に髪を蓄へて江戸に出で、儒學を學びました。時に年二十五歳でありましたが、遂に大學者となつて、別に一派の學問を開きましたが、大いに世に用ひられ、その弟子となつて教を受けたものが六千餘人であつたといひます。かつて會津公が、闇齋に向つて、



「先生の最も楽しみとなさるのは何でありますか。」  
と尋ねました。すると間齋は、

「私が最も楽しみとするものは三つあります。」  
と答へました。そこで候は、

「それではその三つはどんなものです。」  
と尋ねますと、間齋は、

「この世の中に生れて来て、命をもつて住んでゐるものは、獸や鳥や魚や虫けらの類に至るまで、その數がきはめて澤山ありますが、そのうちでも我々人間は萬物の靈長として、物の道理を知り得ることの出来るのは實に幸福なものです。それですから、私は萬物の靈長として此の世の中へ生れて出たのが樂みの一つであります。又世の中といふものは時によつて色々變化があり、盛んな時もあれば衰へてゐる時もあり、或ひは亂れてゐる時代もあればよく治まつてゐる時代もあります。それ

に今私はこのやうな泰平の世の中に生れて出て、書を読み道を學ぶことが出来るのは實に幸福なことです。これが私の第二の楽しみとする所であります。」  
と答へて、二つの楽しみは云ひましたが、今一つの楽しみは何ともいひません。そこで候は又、

「それで二つの楽しみはわかりました。今一つの楽しみといふのは何ですか。」  
と問はれて、間齋は、

「今一つの楽しみといふのは、私にとつて最もよいものなのですが、これはあなたの前ではちと云ひ難うございます。若し言つてしまへば或ひはおとがめに預るかも知れません。」

といひました。候は又、

「何も遠慮する事はありません。私はいつとも先生の忠告の言ばを望んでゐるのです。どうかその楽しみといふのを聞かして下さい。」



といはれましたから、闇齋は、

『それでは申しませう。私は幸にも貧しい賤しい家に生れて、大名のやうな貴い家に生れなかつたことを非常な幸福としてゐるのです。これが樂しみの三つであります。甚だ無體な言ひやうではございますが、どうかお咎め下さいませう。』

『そのわけが聞きたいものです。』  
と問はれました。闇齋はそこで、

『今の諸大名方は、多くは御殿の奥深い所でお育ちになつたために、世の中の難儀苦しみといふものは少しも知らず、又常に女の人たちがお側に仕へてゐますから、だんくんと柔弱な風になつて、遂には文も武も學ばず、徒らに一生を無益に暮してしまふ事が多いやうに見えます。それですから、貧しい卑しい家に生れたものが、着るものや食ふものを儉約して、世間の苦い事辛い事をよくかみわけて、道を學び

藝を習ひ、徳をつみ智識を磨いて、一家を治め世の中を益する者とくらべれば、その身の功といふものは、富貴の家に安逸に暮した者の方が却つて劣つてゐます。私が大名方のやうな富貴の家に生れなかつたのを樂みとするのは、かういふわけでございます。』

と言ひました。候はだまつたまゝ聞いてゐましたが、やゝ暫らくしてから口を開いて、  
『先生のいはれる第三の樂しみといふものは、いかにも意味の深いものです。』  
といはれたといふことです。

闇齋がかく答へたのは、富貴を嫌つたのではありません。富貴を嫌つたならば、勤勉も、勉學も、忍耐も何のためにするのか意味のない事となります。闇齋が貧賤の家に生れたのを幸福としたわけをよく考へて見れば、凡そ人として此の世に生れて、世の中を一つも益することがなく、たゞ美しい着物を着飾り、酒を飲んだりよい物を食べたりして、一生遊んで暮したならば、たとひ七十年生きてゐても百年生きてゐても、



たゞ世の中の物を費したといふだけで何の益にも立ちません。こんなにして一生を夢のやうに送り、何の功もなく死ぬならば、寧ろ生れて來ぬ方がよい位です。又貧賤の家に生れたものは、幼い時から仕方なくその業をつとめねばならぬ所から、やがて勤勉にして業をなし遂げ、世を益する者を出す事が多いのです。それで關齋は富貴の家に生れぬの喜び、賤しい家に生れたのを幸福としたのです。言ばをつめて言へば、富貴を嫌つたのではなく遊惰にして能のないのを嫌つたのです。卑賤を喜んだのではなくて勤勉にして功があるのを喜んだのであります。それですから、たとひ貧賤の家に生れたものでも、遊び怠るやうな事があればそれは少しも喜ぶべき事ではありません。富貴の家に生れたものでも、勤勉であつたならば一層喜ぶべき事であるのです。

關齋がはじめて江戸へ行つた時には、まだ極めて貧しい身であつて、少しの貯へもありませんでしたから、或る書店の傍の家をかりて住んで、その書店から本を借りて讀

んでゐました。

その頃井上侯は學問の志が厚く、名高い學者であれば腰を低うしてこれに問ふのが常でありました。かういふ風ですから、書籍も多く買ひ入れますので、彼の關齋の隣の書店の主人も、度々井上侯に召されて行くことがありました。或る時のこと、例の如くこの書店の主人が井上侯に召されて行つた時に、

『お前の知つてゐる人で、我が先生ともなるべき人があつたらどうか引きあはして呉れよ。』

と主人にいはれました。そこで書店の主人は、

『近頃、京都の者で山崎といふ者が私の店の東に住んでゐますが、どうも尋常の學者でないやうに思ひます。まだあの男も非常に貧しい者ですから、侯がお召しになるといふことを傳へたならば、きつと大喜びに喜んで參る事せう。』

と申しますと、井上侯も、



『そんな男があるのならばどうか呼んでくれ。』

と頼まれましたので、書店の主人は歸つて直ぐさま闇齋の家へいつて、その由を申しました所が、喜ぶであらうと思ひの外、闇齋は大層機嫌わるく、

『私に道を探ねたいなら、先づ第一に候自ら私の家へ來るがよろしい。』

といひました。主人はあまりの事に、呆れかへつて、

『こんな禮知らずの田舎儒者とは思ひもよらなかつた。こんな事なら井上侯に申し上げねばよかつたに。』

と後悔して家へ歸りました。

後この主人が、又井上侯の邸へお伺ひすると、侯は、

『先日話してゐた山崎といふ儒者はどうだつた。』

とのお尋ねです。主人は、

『いやもう何とも申譯がありません。彼の男は禮を知らぬにも程がありますのに、道

を問ひたければ候自ら我が家に来なさるがよいなど、まるで狂人のやうなことを

言つてゐます。あんな田舎學者はとても師となさるに足りません。先日の言ば、

私の分らなかつたためです。どうかお許し下さい。』

といひました所が、侯ははたと膝をたゝいて、

『いや、それこそ本當に尋常の儒者でない。きつと立派な學者であらう。』

といつて、その日直ちに駕を命じて闇齋の借家に行き、その意見を尋ねました所が、

果して眞の儒者であつたものですから、厚くこれをもてなして、それから後は闇齋に

絶えず邸へ伺候するやうにしたといふことです。

△山田方谷

技術家が道具を作るのに、如何にその術が巧みであつても、世の中の實際の役に立たなかつたならば少しも貴ぶには足りません。道具の價値があるのは、役に立



つからであります。それですから役に立たぬ道具は無用の長物で、たゞ邪魔になるだけのことです。學問もこれと同じく、實際の役に立たぬ學問は身にもつてゐても何の價値もなく、學問が如何に深かつて、それを實際の役に立てなかつたならば、その人は無學の人と少しもちがつた所はありません。

山田方谷の如きは、最もよくこの學問を實際の用に役立てた人でありませう。

山田方谷は備中の人でありました。名を琳卿といひ、通稱を安五郎といつて、方谷といふのはその號であります。今からざつと百十年ばかり前、文化二年といふ年に生れました。家は農を業としてゐましたが、方谷は幼い時から他の子供とはちがつた所があつて、早や三四歳の頃から、本を讀むことが大層好きでありました。八つか九つか位の時には、既に文を書くことも出來、詩さへ作つてゐたといひますから、如何に才智すぐれた子であつたかといふことがわかります。或る時のこと、方谷の家へ來た一人の人が、幼い方谷に向つて、

「お前は一体學問などして何うしようと思ふのか。」

と問ひました。幼い方谷がどんな答へをするかと思つてゐますと、まだ聲も終らぬさ

に、「言ふまでもなく國を治め天下を平らかにしようが爲めです。」

と、小さな唇からはつきりと言ひ放ちましたので、その人も非常に驚いて、年に似ず何といふ賢い兒だらうと思つたといふ事です。

所が事はそう都合よくばかりは行かぬもので、こゝに方谷にとつて非常に不幸なことが出來ました。それは方谷が十五歳の時、お父さんもお母さんも二人とも引きついで死んでしまつた事でした。如何に氣の勝つた方谷でも、まだ十五歳の年はも行かぬ時に親を二人とも失つてしまつて、どんなに悲しかつた事でせう。しかしながら流石は賢い方谷のこととて、遂には氣をとり直して、

「如何に悲しんだ所で、なくなつた父上や母上がお歸りになるのでない。これからは



あきらめて一生懸命に勉強して、一人前の立派な者とならねばならぬ。それがなくなられた父母に對してのつとめである。』

と、心に堅く思ひ刻んで、それから後は自分で家のつとめを盡して、暇ある毎に學問に心をこめて少しも怠るやうな事はありませんでした。

かがやく月に叢雲がかゝり、吹き匂ふ花に風が吹くのは、この世の中の常であります。しかし雲とてもさう何時までも月を隠してはゐません、一度散つた花も又時が来て咲くやうになります。父母を失つて不幸の淵に沈んでゐた方谷も、そのけなげなつとめ振り勉強ぶりに、こゝに幸福の光が下つて、嬉しい頼りが出来ました。それは松山藩主の板倉侯が、方谷の心を大層感心して、召し出して二人扶持を與へ、學問する助けとしたのでした。後にはますます方谷の行ひが氣に入つて、八人扶持を與へて中小姓の格に取り立て用ひ、藩の學問書の會頭としました。時に年二十五歳でありました。

二年ばかりしてから京都へいつて學問をしようと思ひ松山を出て行きました。京都へ来てからは、寺島だとか鈴木だとか春日だとかいふ學者と交つて研究してゐましたが、こんどは江戸へ出て佐藤一齋といふ學者の弟子となつて勉強し、又佐久間象山、塩谷岩陰などいふ名高い人々と交つて、共々學問にはげんでゐましたが、凡そ八年の間もこの江戸にゐて、その間非常に熱心に勉強したこととて、學問は大層進んで、もう天晴れの學者となりました。そこで板倉侯は碌を増して六十石とし、藩の學頭としました。方谷は學問が深い上に、その教へ方は極めて丁寧であつたものですから、松山藩の中の人と言ふまでもなく、遠い國の人々たちまで澤山出て来て、その教を乞ふものですから、方谷の塾は狭くて仕方がない程になりました。

その後方谷は藩の勘定方を命ぜられて、米や穀物の出し入れの事を勤めてゐましたがこの頃にその藩の中には紙幣が無やみに多くて、色々な品物の價が非常に高くなつて人民は大層困りました。そこで方谷はその紙幣の高の半分ばかりも焼き捨てしまひ



ましたので、相場は元の通りになつて人民は非常に喜びました。  
 又領内から出る産物をふやして、これを江戸へもつていつて賣らせ、その利益金を以て江戸屋敷の費用にあてることに定めなどして、種々の事に心を用ひたものですから後には餘分の金も出来、軍備も十分整ひ、藩につかへてゐる侍たちの碌も十分にあてがふ事が出来るやうになりました。

板倉侯は後に方谷を郡代といふ役にして、領分内の在所の方の政治をとらせました。方谷は郡代となつてからは奢りを禁じてその風を止め、學校をこしらへて人々に學問をすゝめ、道を開いたり或は修繕して交通を便利にし、川浚をして水の通じをよくし又農民を組み立てた兵をこしらへて非常の備へとするなど、種々苦心をして政治にとめましたから、十年程の間に風俗が大變よくなりました。又板倉侯も藩の侍たちの風をよくするやうにつとめ、文武の道をすゝめ、或は軍艦をつくつて西洋の式を用ひるなど、いろいろ政治をよくしましたが、これらは皆方谷がすゝめた所であつたとい

ひます。

かく方谷のいふ事がよく用ひられて、侯も大層方谷を大事にしましたので、藩につかへてゐるものは、そろ／＼方谷をねたみかけました。そこで色々わるくいふものが出来ましたが、方谷はそんな事には少も耳をかたむけず、只一づに藩のために働いてゐましたので、板倉侯もいよ／＼厚く用ひて、更に百石の祿を増してやり、その上よい役につけましたので、妬んでゐたものも遂に方谷のえらいのに感心して、皆よく心服したといふ事です。

この通りでありましたから、松山藩の政治は實によく行きとゞいて、これにくらべるよい政治のやり方はないとまで諸國に評判せられました。そこで他所の藩からもその風俗を見に來たり、政治のことを聞きに來たりして、松山藩を手本にして自分の藩ををさめて行かうといふ藩が澤山あつたといひます。

文久元年に、松山藩主の板倉侯は、幕府から寺社奉行に任せられて、江戸へ行く事に



なりましたので、方谷もついて江戸へ行きました。血を吐く病にかゝつて國へ歸り養生をしてゐました所が、侯から召されて又も江戸へ行き、いろ／＼侯の相談にあづかつてゐましたが、その名がだん／＼と高くなり、將軍に目見えを許されて、遂には家老格にまで上されました。

かくてその後も藩のため侯のため、又國のために力をつくして多くの功がありました。が、遂に明治十年、年七十三でなくなりました。

方谷は人となり豪傑の風があつて、殊に智恵才略があり、常に人より勝れた意見をもつてゐましたが、大層つゝしみ深く、忠義の心が厚うございました。若い時には大酒を呑んで、一夜飲み明かすやうな事がありました。そのため病氣にかゝつて、それからは大いにこれまでの亂暴を後悔して、一切盃は手にも取らぬやうにしたといふことです。

▲毛利元就

貝原益軒の語に、

「志を立つるは大にして高きを欲す、小にして低きを欲せず。小にして低ければ成に安んじ、大にして高ければ則ち大成を期す。凡そ事は上を學んで中に至り中を學んで下に至るものなり。故に天下一等の人なるを志すべし。」

といつてゐます。諺にも、「棒ほど願つて針ほどかなふ。」といつて、大きなことを願つてゐても、思つた通りに成功するは少いといつてゐます。苟も志を立てるには、天下一等の人物とならうといふ大なる志をもつて、これに向つて一心を凝らし、以つて目的のために奮闘努力すべきであります。

「蛇は寸にして人を呑むの概あり。」といつて、後に立派な偉人となるべき人は、必ずや幼い時から大志を抱いて、奮闘した人であります。最初から人の後について



そのお蔭を蒙らうなどと思ふものは、競争烈しい世の中になつて、到底身を保つことは出来ません。毛利元就の如きは、實に幼少の時から、所謂『蛇は寸にして人を呑むの概』あつた人であります。

毛利元就は、幼名を松壽丸といつてゐました。幼い時から普通の子供とちがつて、やがては立派に成人して、人の上に立つべき風がほの見えてゐました。

或る時のこと、乳母に抱かれて河を渡つてゐましたが、どうした拍子か、乳母がすべつて水の中へ倒れました。抱かれてゐた松壽丸は、水の中へ落ちて、少なからぬ水を飲みました。乳母は非常なしくじりをしたものですから、直ちに松壽丸を抱き上げてその過を詫びました。普通の子どもならば、泣いたり怒つたりする所ですが、松壽丸は少しもそんな様子はなく、

『道を歩いてゐて躓く位のことには、あたり前の事だよ。なんにもあやまらなくてもいい』

といつた切りで、却つて乳母を氣の毒がつてゐたといふことです。まだ乳をはなれて間もない幼少な松壽丸が、人の過をとがめなかつた胸の廣いことは實にこの通りでありました。後に至つて、臣下のものが、元就の用を樂しみ喜んでしたといふのも、誠に無理のないことであります。

又或る時のこと、僕に負はれて嚴島神社へまゐつた事がありました。その歸る道すがら、松壽丸は僕に向つて、『

『一体お前は今日嚴島神社へまゐつて何を祈つたのだえ』』  
と問ひました。僕のは

『若様（松壽丸をいふ）が大きくなられて、この安藝の國の領主とおなりになるやうに祈りました。』

と答へました。すると松壽丸は、

『なせ日本全國の領主となるやうに祈つてくれぬのだ。天下の主とならうと願つてゐ』



るものは先づ一方の主となることが出来るし、一方に主とならうと望みを抱いてゐるものは先づ一國の主位にしかねぬ。それに一國の主となる位のことを望んでゐるやうでは、祿なものには成れぬだらうよ。』  
 といつたので、その僕はじめ、これを聞いたものは皆その志の大きいのに驚き感じたといふことです。

それほどの大志を抱いてゐた元就は、成長してから果して立派なものとなり、僅か二ヶ所の庄園を領してゐた小名の身から、周防の領主大内義隆のために義兵をあげて、陶晴賢を嚴島に破り、兵威いよ／＼あがつて遂には山陰山陽十餘ヶ國の領主となつて子孫大いに榮えました。

### ▲高野長英

幼にして勉學の心やみ難く、遂には養家をのがれ出で、江戸に向ひ、學にはげん

で孜々として怠らず、翻譯に於てはシーボルト氏門下の第一位を占め、遂に幕府に忌まれて捕吏のために捕へられ、獄中に苦しんだ高野長英は、たゞに學問にはげんだのみならず、又年老いた母につかへても極めて孝行でありました。

なげかるゝ身より嘆く老の身を

嘆きこそすれ嘆かるゝ身は

とは、長英がその母を思つて嘆いた時、おのづと口ずさまれた胸のひびきなのでした。

高野長英は陸中膽澤郡水澤の人でありました、文化元年五月五日に生れ、幼名を悦三郎といひました。後に名を讓といひ、號を瑞阜となへ、父は後藤總助といつて、その三男でした。

長英は十四歳の時、叔父の高野玄齊といふ人の養子となりました。この玄齊は蘭方の醫術に達してゐた人でしたが、長英を養子に貰つて、その名の悦三郎といふのを郷齊



と改め、自分から和蘭の醫學を教へ、かたはら他の先生について和漢の學問を勉強させてゐました。文政三年、長英は十七歳となりましたが、この年どうかして、江戸へ行つて勉強して見たいと思ひましたが、何をいふにも旅費もいるし、學資もいることでありますから、父に願つて見た所で駄目だらうと思つてゐました。しかしながら、一度思ひたつた事をこのまゝ止むのも残念と思つて、どうにかして志を遂げようと種々苦心をして工風をめぐらしてゐます折柄、たま／＼養父玄齋がかねて加はつてゐた頼母子講があつて父のかはりにその講に出席し、圖を引きましたのに、圖らずも長英に當つて、忽ち十兩ばかりの金が手に入りました。

長英は心のうちに大層喜んで、

『これこそ天の助けといふものだ。今この金を持つて家をぬけ出て、江戸に上つたらば、かね／＼からの望みも達せられる。金を持つてにげるといふのはひどい悪い事ではあるが、後に立派な者となつた上で、その罪をわびれば許して貰へぬ事もな

からう。いつそ此のまゝ逃げて江戸へ行かう。』

と、遂に覺悟を定めて、養家へは歸らず、一先先生の家へ行きました。この先生の家にも一人の子があつて、その子は近日の中に江戸へ上らうといふので、それと共に行かうと思つて、この家へ來たのです、先生の家でも捨て／＼おくわけに行ませんから、取りあへず玄齋の家へその由を告げました。

玄齋は初めは非常に怒つて、

『不埒千萬な小忤めが、家の金をもつて逃げるとは何といふ太いやつだらう。』と思ひましたが、更に考へ直して、

『酒など飲んで親の金を多く費すものも世の中には少くない。家の金を持つて逃げるとは重々不届ではあるが、修學のために江戸へ出たいと一途に思ひこんで、濟まぬ事とは知りながらも、願つた處でとても許されぬであらうと思ふ心から、かゝる事になつたとすれば、その心の中はあはれなものである。よし、それ程までに思つて



ゐるなら許してやらう。』

と、有がたい事には十兩の金は學資金として長英に與へ、江戸へ上る事を許しましたので、長英は天にも上る心地して、喜びのあまり涙を流して感謝しました。かくて水澤を出て遂に江戸につきました。

江戸へ出てからは、玄齊の友藥種屋源藏といふ人の世話で、その頃江戸で名高い吉田長淑といふ學者の門人となりましたが、その學問に勉強することは、他の友たち等とはすつとよくつとめて、その上生れつきが賢かつたものですから、學問はずん／＼進んで、間もなく長淑門下でも一二を争ふ程の門人となりました。長淑も、末たのもしい青年だと思つて大層可愛がり、自分の名の長の一字を與へて、郷齊といふ名を長英と改めました。

長英はかくて三年ばかり、たゞ一途に學問をはげんでゐましたが、元來生れつき孝行な人でしたから、その生みの父母や義理の父母の顔が見たいなどと思ふこともあつて

流石は故郷戀しくなつたものですから、一度水澤に歸つて兩父母に會はうと、時は文政六年、はる／＼と故郷へ歸つて來ました。

所が養父玄齊は、最初長英が家出をした罪を許した程の人でしたから、長英が歸つて來たと聞いて、

『立派な一人前の者ともならず故郷へ歸つて來るとは何事ぞ、家出までする程に思ひつめておきながら、學問も成就さ／＼に歸つてどうする心ぞ、この玄齊は江戸見物ささうと思つて十兩の金を與へたのでない。立派に出世して歸つたのでなければこの玄齊は顔を合はさぬぞ。』

といつて、中々家の中へは入れません。養母は様々とりなして、

『たとひ直ぐ様江戸へ追ひかへすにもせよ、義理ある子ですから、世間の人の前もありませんから、せめては一度だけでも面會を許しておやり下さい。』  
と、いつかな事聞き入れません。



はる／＼江戸から歸つて、義理の父にも面會して、久しぶりに語りあはうと思つて歸つて來た長英は、この父の言ばを聞いてどんなに思つたでせう。

長英はこの言ばが腹わたまでも染みとほつて、非常に後悔し、直ちに養家を出て前の先生の家に泊り、間もなく再び江戸へ來て、又吉田長淑の塾にあつて勉強すること二年に及びました。

所が長英は、かね／＼から長崎へいつて親しく和蘭人について學問をしたいと思つてゐましたが、よいつてがあつたので、先生の長淑に相談をしました所が、長淑も大いに賛成し、藥屋源藏は旅費や學資を出してやるとのことで、長英は大喜びで長崎へ行くことにしました。國の父母へは手紙を送つてその由を陳謝し、それから長崎へいつて鳴瀧村にあつた、蘭醫シーボルト氏の塾に入り、學問をばげみました。その塾には餘程熱心な門人も多くありましたが、長英は非常な勢で勉強にはげんだものですから、蘭書を翻譯することについては、誰れ及ぶものがない位に上達して來て、遂

にその塾の翻譯教授を受持つことになりました。

かくて長英は後、又江戸に出て麴町にゐましたが、これまで藥屋源藏が色々世話をしてくれたり、その上學資金まで多く出してくれた恩をかへすため、種々の秘藥のこしらへ方を教へて、源藏に大利を得せしめました。このため源藏は學資金の幾十倍にも當る利益を得て、店は益々榮えたといふ事です。

長英は麴町で蘭醫をはじめましたが、療治を乞ふ人も多く、又學問を授けて貰はうと思つて頼んで來るものも非常に多くありました。

所が後に『夢物語』といふ書物を著して、外國の事など書いたのがもと／＼なつて、心よからぬ幕府の役人たちのために獄に入れられるやうになりました。天保十二年獄に火災があつて、長英はのがれ出て各地に隠れ、名をかへて翻譯など多くしてゐましたが、後に江戸の青山にかくれてゐました。嘉永三年それが知れて、幕府の役人にふみこまれましたから、その一人を殺しておいて自分は自殺し死でしまひました。



明治三十一年七月になつて、朝廷はこれに正四位をお贈りになりました。

△小田雪舟

『志の向ふ所は堅も入らざるはなく、鋭兵精甲も禦ぐこと能はず。』といひます。如何に力の強い敵が來ても、鋭い刀で禦げば禦げぬ事ありません。如何に強い矢でも、よい鎧であればこれを防げぬ事ありません。しかしながら一旦志を立て、奮發勉勵、以つて努力したならば、如何に難なる事と雖も成功しないといふ事がありません。『男子の一念岩をも通す。』といふ勇氣こそ、世の少年が事をなすのにも一日も忘れてはならぬ事であります。そして又『學をなすには專一ならざれば其の志立たず、その功ならず。』といつてゐます。小田雪舟の如きは、實にその學につとめて志を専らにしたよい例であります。

小田雪舟は、備中の國の赤濱といふ所の人でありました。お父さんは、雪舟を坊さん

にしたものだと思つて、十二三歳の時に、雪舟を寶福寺といふお寺へやつて、その弟子僧にして貰ひました。

雪舟はお父さんの命で仕方なく寶福寺へは來たものの、坊さんになることは大のきらひであつたのです。なせかといふに、この雪舟は幼い時から大の畫好きで、暇さへあればいろ／＼な畫をかいて喜んでゐたのですが、お寺へ小僧に來ると、さう畫ばかりかいて遊ぶことは出來ず、面白くもないお經を讀まされるものですから、雪舟にとつては實に不愉快でたまりませんでした。妙なもので、自分が進んでやつて見ようと思ふやうなことは早く上達するし、上達するから一層面白くなつて來るものですが、これと反對に、嫌ひな事は中々上達が出來ず、上達が出來ぬから一層嫌ひになつて來るものです。諺に

『好きこそ物の上手なれ』

といつてゐるのもここなので、好きである事はきつと上手になり易いものです。



お經を讀むことは雪舟にとつては大の嫌ひであつたのです。こんな嫌ひなお經の書物が、どうして雪舟の頭によくは入りませう。雪舟はそれで愈々お經の書物を讀むのがきらひになつて、和尚さんの目をぬすんではそつと書の稽古をしてゐました。和尚さんは、

『僧になるのに書など習つて何の益に立つ？そんな暇があればお經の書物の一枚なりと讀むがよい。』

といつて叱りますが、又和尚さんの見ぬ所ではすぐお經の本を捨てゝおいて書をかいてゐます。そこで和尚さんも、これは一つ手きびしく叱らねばならぬと思つて、とう／＼雪舟を繩でしばつて、堂の柱に縛りつけておきました。雪舟は悲しくてたまりません、一時間たつても許してくれず、二時間たつても繩を解いてくれません。その中に日はだん／＼と西の方へいつて、早や日の暮れ近くなりました。そこで和尚さんも、もう許してやらうと思つて、雪舟を縛りつけておいた堂へいつて

見ました、堂の近くまでいつて見て、和尚さんはあつとびつくりしました。それは、縛りつけられてゐる雪舟の足元に、一匹の大きな鼠がゐて、今にも雪舟にとびかゝらうとしてゐる所なのです。驚いて和尚さんが傍へいつて見ますと、その大きな生きた鼠だと思つたのは、雪舟が一日中柱に縛られてゐた、悲しさの餘り流れて出ておちた涙を足の拇指につけて描いたものでした。

これを見た和尚は二度びつくりし、  
『さても感心な子供かな、こんな子を無理に僧にしようといふのはこの子の爲めによろしくない。それよりか書を學ばして畫家にするのが一番よい。』  
と思つて、遂に書を學ばせました。

雪舟は後には明の國へ渡つて、畫の先生を探して教へて貰はうと思つて行きましたが先生にする程立派な人が一人もないのですから、諸所の名所などを巡つて、自然の風景を調べました。明の國の人々も、その畫の上手なのに感心しないものはなく、今



に至るまで雪舟の書は世の中でもてはやされてゐます。

▲加々美光章

人、一旦志を立て、奮發勉勵する時には、家の貧しきも、人のそしりも、はたまたその他の困難も眼中におかぬやうにせねばなりません。貧しきがために事を中途で止め、困難なるがために業をかへるやうでは、眞の事業はなし遂げられませんがせん。

支那の車胤は家まづしくて油を買ふ錢がなく、夏は螢を囊に入れてその光で書物を読んで勉強し、孫康といふ人も亦家貧しくて油が買へず、冬は雪を積んでその光りに書物を照らして勉強しました。二人ともこの所謂『螢雪の功』積んで、後には立派な官につきました。が、こゝにこの車胤孫康にも劣らず貧しきにゐてたえず苦學をした人が我が國にもあります。即ち今いはんとする加々美光章はその人であります。

加々美光章は、甲斐國山梨郡の人で、號を櫻塙といつてゐました。幼い時から大層學問が好きでした。我が國の書物はいふまでもなく、儒經釋典をはじめ、天文曆學算術など、すべての學問によく通じてゐて、和歌は竹風亭を先生として學び、文學は三宅尙齋といふ學者について勉強し、それ／＼皆人から敬はれるほどに名高いものでした。

はじめ家が大層貧しくて、其の日／＼の米買ふ錢さへも不自由がちでした。若し志の弱い人であつたら、かう貧しい暮しをせねばならぬやうになると、すぐに初めの志を折つてしまつて、或ひは金もうけに近い仕事についたり、勇氣をなくしてしまつたりする者ですが、光章は決してそんな意志の弱々しい、勇氣のない人ではありません。貧しくなればなるほどその志をかたくし、困難に逢へば逢ふだけ勇氣が一層加はる人でありましたから、少し位貧しい事は何とも思はず、ただ／＼勉強に餘念が



My father's book

ありませんでした。所がこんなに貧しいものですから、油を買ふことが出来ません。そこで光章は考へて、線香に火をつけて、その光によつて書物の文字を照らし見て、大いに讀書をしました。その苦心のおかげは追々とあらはれて、遂には學問も餘程進んで來ました。後に業をなしとげるやうになつた、その名は四方に聞こえて、門人となつて教へ乞ふものが多く、澤山の弟子を持つやうになりました。光章はかくの如くに勤勉でありましたが、その上に氣質が非常におだやかで親切だつたものですから、これまでにその名を聞かなかつた者も、一言話せばもうその人柄に感服して、たゞく敬ひ慕ふ外なかつたといふことです。

伊勢屋吉兵衛

句に曰く、

けぶくともあとは寝やすき蚊やり哉

夏の夕べ、蚊多き時に、一度蚊やりの煙を室にみなぎらした後は、人さす蚊も居らず、横に臥しても臥し心地よくなります。しかし煙が室にみちてゐる時は、随分けむくて困る程ですが、暫らくすればやがて心のどかに臥すことも出来るのです。

後に成功をして、安樂を求めようとするには、誰れしもこの忍耐が必要であります。世の中に暮して行かうと思ひ、ことをなさうとするには、随分つらいこともあり難儀なこともあります。この難關を通り越さねば立派なものとはなれません。

伊勢屋吉兵衛の如きは、實によく忍耐して、遂には主人に重く用ひられるやうになつたのです。

伊勢屋吉兵衛は、幼い時の名を吉松といつてゐました。十一歳の時に、故郷の近江から二人の友だちと共に江戸へ來て、伊勢屋彦四郎といふ人の家に奉公したのでしたが



主人の家へこの三人が着いた時に、他の二人は直ぐに草鞋を脱ぎすて、そのまゝ足を洗つて上りましたが、吉松だけは草鞋を脱いで、それを水で洗ひ、それから垣にかけておいて後に、足を洗つて上り、主人に出逢ひました。主人はつくづくこの三人のする事を見て居りましたが二人が草鞋をそのまゝ捨て、おいたに引きかへて、吉松だけが草鞋を水で濯いだ後に垣にかけておいたのを見、その注意の行き届いてゐるのを見て、大層感心し、

『吉松はきつと立派な心がけの者にちがひない。』

と思ひました。かくて主人彦四郎はだん／＼吉松を使つて見ましたが、他の子供とはちがつて、すべての事によく注意が行きとゞいて、大人も及ばぬ程でした。

一體この主人の彦四郎は、江戸本郷での第一等の糶屋で家に使つてゐる若い者は二十人あまりあつて、皆毎朝家を出ていつては糶を賣りに行き、夕方になつて米一臼づゝ舂いて、それを入れ物の中へ入れておいて、それからは、皆々自分勝手に遊ぶのが常

でしたが、或る時に彦四郎が庭前を見ると、そこに吉松が涙を流してばんやりと立つてゐます、彦四郎は不思議に思つて、

『なぜそんなに涙を流してゐるのか』

と尋ねました。すると吉松は、

『當家は大層富み榮えてはゐますものゝ、米を盗むものが多いのは實に残念なことです、このやうに盗まれては、如何に多い財産でも、おしまひにはなくなつてしまふやうな事がありはすまいかと思つて、思はず涙を流したのでございます。』

と云ひます。そこで主人は、  
『一體、家の米が盗まれるといふ事を、どうしてお前は知つたのか。』

と尋ねます。吉松は、

『昨晚米をついて、入れ物の中へ入れた時に、そつとその米の上に、大の字を幾つも書いておきましたのに、今朝見ますと、その大の字は大方皆消えてなくなり、もと



のまゝであるのは極めて少しです。これは人が手を入れて盗み取つた證據でありま  
す。』

と申しのべました。これを聞いた彦四郎は、成る程とは思ひましたものゝ、心の廣い  
ものでしたから、吉松にいつて聞かして、

『少々盗人があつた所で、そんなに悲しがるにも及ばぬ。どこの家だつて少しづつ  
物を盗まれるのは當り前の事だ。しかしこれからお前に米奉行を申しつけるから、  
能く氣をつけて米を盗まれぬやうにせよ。』

といひました。

吉松は大きくなるのにしたがつて、商賣の事は他の二十人ばかりの者よりもずつと優  
れ、毎朝午前四時に起きて、朝飯前に糶一荷をもつて芝邊へ行つてこれを賣り拂ひ、  
歸つて後又神田邊を賣り歩いて、殆んど二人前の利益を得るのが常でありました。そ  
こで主人の彦四郎も、吉松が大層よく精出してつとめるのにいよゝゝ感心をしてゐま

した。

吉松が十八歳になつてゐた或る時のことでした。彦四郎は吉松の心底を試して見よう  
と思ひ、或る朝、吉松が他の者よりも遅く歸つて、まだ朝飯も食べて居らぬのに、

『今直ぐいつて、水を一荷くんで来い。』

といひつけました。所がこの水を汲む場所は、主人の家から大分離れてゐる所なので  
吉松は空き腹をかゝへて水を汲みに行き、一荷汲んで歸りますと、又も、

『今一荷汲んで来い。』

と命じます。君松は心の中で、

『他の者は自分より早く歸つて来て朝飯も食べてゐるのに、それらの者には汲ませず  
自分ばかりに云ひつけるのはどうも合點のゆかぬ事だ。』

と思ひながら、吉松は又一荷汲んで歸りますと、主人は尙も、  
『今一荷くんで来い。』



と命じます。そこで吉松も大いに主人を怨み、これはきつと自分を責め殺す氣にちがひない。これほどまでに勤めてゐるのに、かう酷くつかはれるのなら、もう仕方がないから、今日までの命とあきらめて河へはまつて死なうと思ひ、既に石を拾つて袂へ入れ、飛び込むしらへをしてゐましたが、ふと思ひかへして、  
 『いや、これはひよつとすれば他の者が主人に讒言したのかも分らぬ。まてく水を汲んで歸つてから、又何とか仕様があらう。』  
 と考へ直して、水を汲んで歸つて行きました。すると主人は大層悦んで、下女に命じて吉松の足を洗はせ、自分の居間へよんで、着物を着かへさせ、袖の小袖一重を與へて云ひますには、  
 『嘸かし疲れたであらう。私もお前を待つてゐてまだ朝飯も食てをらぬ。一緒に食事をしよう。』  
 といつて、鯛の焼物などの料理を出してやり、食事終つてから、二十人ばかりの若い

者呼び寄せて、  
 『今日から、吉松を吉兵衛と名を改めて、稚方の番頭を申しつける。お前たちのうちでこの吉兵衛の云ふ事に従はぬ者は、直ぐに暇をやる。又吉兵衛はこゝにゐる二十人の者は心のまゝに使ふがよい。若し氣に入らぬ者があつたら、私に相談せず暇をやつてよろしい。萬事はお前に委すからよい様にとり計らへ。』  
 といひました。かくて吉兵衛は番頭になつて、店の事をすべて自分一手でやるやうになりましたが、これ全く吉兵衛が主人の云ひつけを守つて、忍耐したおかげであります。

△綾部道弘

『家を治むるには四教あり。一には家事をつとめて生業を修め、二には儉約にして財用を足し、三にはつゝしみて成が身を保ち、四には恕にして人を愛す。』



とは、古人のいつた言であります。

家を治めて行くにはこの四つのごとが必要です。即ち第一には、家の中をよくと  
ゝのへて、その職業をつとめ勵み、第二には、節儉をしてよく財産をふやし、第  
三には身をよく謹んで一身を大切に保ち、第四には能く人に情をかけて他人を  
愛していつたならば、その家はますます榮えて人からもにくまれるやうな事はあ  
りません。

こゝに綾部道弘といふ人がありますが、この人などは最もよく勤儉を以てその身  
ををさめ家ををさめた立派な人であります。

綾部道弘は、豊後の人でしたが、その先祖は丹波の綾部にゐましたので、綾部といつ  
ていました、子孫は代々豊後にゐて、大友氏の家臣となつてゐましたが、大友家が亡  
んでしまつてからは、道弘の祖父は主人を求めずに暮してゐました。

道弘は、性質が大層剛直で、幼い時に叔父さんの家へ子にいつてゐましたが、その家

の者が、道弘の幼いのを侮つて、無禮なもてなしばかりしたものですから、道弘は夜  
おそく叔父さんの家をぬけて出て、一里あまりもある淋しい野原を過ぎて、父母の家  
へ歸つて來ました、道弘はその時まだ、やつと八歳の小さい子供でしたが、年のいつ  
た者でさへ寂しがらうな處を、夜おそく只一人で歸つて來た大膽さに、父母ともに  
驚きよろこんで、それから後は一層可愛がつて育てました。

或る時のこと、父は試しに古い書物を出して來て、その中にあつたむつかしい文字三  
四百も讀んで見せますと、一度目を通した所は、たゞの一言も一句も忘れることがあ  
りませんでした。あまりに物おぼえがよいので、父も母も共に大喜びで、いよく愛  
し育てました、父はいつも、

『この邊にはよい先生とする人もなく、家は貧しくて財産がないため、物おぼえのよ  
いこんな兒をもつてゐながらも、勉強することが出來ぬとは、實に残念である。』  
といつてゐました。



道弘はかく物覚えがよいだけでなく、又大層孝行の心が厚うございました。年十七の時に、不幸にも母が病氣でなくなりましたが、この時など日夜涙にむせんで、その泣く聲が永い間絶えた事がなく、又墓の近くに小さな小屋をたて、そこに居り、したしく毎日弔ひをしました。

家が貧しくて、家内のものが暮して行くにも不自由な位でしたので、二十歳の頃から隣の藩へ事へしましたが、暇ある毎に時々家へ歸つて父に孝行をつくしてゐました。その間にも、勉強して書物を読んだり、又醫術を學びました。

父には大層孝行で、常々味のよいものをさし上げて喜ばせたいと思つてゐましたが、遂に、主人のない身となつて、あちらこちらと廻つて長い年月の間、他所の地にゐました上に、不幸にもその兄が久しく病氣にかゝつて、家の財産はますます少くなつてしまつて、遂には少しばかり残つてゐた田や邸地までも抵當にして金を借らねばならぬやうになりました。それで道弘は大層これを心配して、再び故郷に歸つて、或る藩

につかへて祿を受け、その祿を分ちて兄にあたへ、抵當に入れてある田や邸地をかへして貰ふやうにしました。

兄は幼い二人の兒を残して遂に死にました。兄思ひの道弘は非常に悲しみましたが、その二人の兒を養つて遂に成人させました。

道弘は又非常に親族にも情深く、その難儀に逢つてゐるものがあれば、どんな場合でも、これを捨て、おくやうな事はありませんでした。

道弘は常に質素を旨として、かりそめにも飾つたり奢つたりするやうな事はありませんでした。或る時のこと、人がその子に美しい衣服を贈つてくれたことがありました所が道弘はその子にこれを着ることを許しません。そして

『お前たちの祖父さんは、大層家が貧しい時に、不自由をこらへて遂になくなられた私はお父さんに暖い物を着せて上げることも出来ず、うまい物をさし上げること  
も出来なかつたのを、今でも残念に思つてゐる。今は幸にも祿を頂戴して、さした



る不自由もなく、お前たちを養つて行く事の出来るのは、全くなくなられたお父さんのおかげである。人は誰れでも奢りには傾き易く、儉約の方へは向きにくいものである。私はお前たちは可愛いからあの美しい着物も着せてやりたいが、奢りに傾かぬやうにと思つて着せないのである。』

といつてさとしましたので、その子も大層これを有りがたく思つて、よい物を着たがるやうな事はありませんでした。

道弘はまたよく刀剣を鑑定しましたが、或る時人から刀を買ひました。價は安いものでしたが、買つて歸つてよく見てみると、それは中々のよい刀で、賣つた人はそれを知らずに安く賣つたのでした。そこで道弘は氣の毒に思つて、早速その賣つた人をつねて、それを返してやつたとこふことです。

石多仲

如何に高く大なる志をもつてゐるにもせよ、勤勉することがなかつたならば事業を成就することが出来ぬのは勿論のことです。

時はしばらくも止まず、一日は二十四時間だといふものゝ、現在の時は僅かに一秒一瞬であります。この極短い一瞬一秒は、一度去ればまたとはかへつて來ません。人生五十といふも七十といふも、この短い一瞬一秒の積もつたものでありますから、一瞬一秒を無益に費すことは、やがて一生を無益に費すことでもあります。

一度志を立て、事業をなさんと思つたならば、一瞬一秒も無益に費さず、其の初志を保つて百折たはます千挫屈せず、間斷なき勉強と、もれなき工夫とを以つて事を遂げなければなりません。



諺に曰く「時は金なり」と。  
又古語に曰く「大禹は聖人なり、乃ち寸陰を惜む。衆人に至りてはまさに分陰を惜むべし」と。

實に時ほど大切なものはなく、金は一度失つてもまた得ることがありますが、一度失つた時は再び得ることが出来ません。時はまさに黄金よりも貴いものであります。しかもこの時は大切なるが上に、きはめて失ひ易いものでありますから、平常怠らずに勤めて、この時を價値あるやうに用ひなければなりません。』

石多仲の如きは、實にこの時を惜しんで學問をはげんだ人でした。』

石多仲は瀬濱と號して、奥州瀬の上村の農家に生れました。幼い時から非常に學問が好きでしたが、少し大きくなつてから、江戸に出て、自分と同じ地方から來てゐる餘熊耳といふ人について勉強をしました。この熊耳といふ人は塾を開いてゐたのですが、瀬濱はこの塾に十年ばかりもゐて勉強し、日夜怠らずにはげみました。その時間を惜

しんだことは非常なもので、たとひ少しの時間でも、これを無益につかふやうなことはありませんでした。

毎年十二月頃になりますと、翌年の曆一冊を買つて、これを厠の中の壁の上に、糊で張りつけておきました。これはどうするかといふと、厠へ行くたびにこの曆を見て一度ゆく毎に一月の支干や、晝と夜との短長や、或ひは氣節のことなどその他曆に書いてある事がらをすべて暗記しました。大層記憶力が強かつたものですから、かくして十二度厠へ行けば、明年一ヶ年間の曆の中にかいてある事柄は全く暗記してしまひました。暗記するのが終つてしまふと、その曆をはぎ取つてしまひました。かうして暗記しておけば、後になつて曆を見たい事がたび／＼あつてその度ごとにたとひ少しの時間でも曆を開いて見る時間を費さなくともよいからかういふ風にしたのです。少しの時間も惜しんだのは、概ねこのとおりでありました。それですから、追々學問も進んで來て、年二十九の時、芝の三田といふ所で塾をひらき、弟子を教へました。



生徒もだん／＼と多くなりかけ、名も追々と高くなつて來かけて、瀬濱の學問も餘程精しくなりましたが、をしい事には歳三十八で病氣にかゝり、遂に寶曆八年になくなりました。

△福澤諭吉

世をすくふの氣魂は死するまで豪壯、自ら社會を改善する使命をおびた如くに思ひ、徳川時代の陋習を破つて明治の文明を開き、自由平等をとなへて金銭の貴ぶべきこと、時間の重んずべきことを教へ、人間の價値の何者よりも高く大なることを教へたのは、實にわが福澤諭吉であります。

實に福澤諭吉は武士的愛國的の血性男子でありました。世をすくふ事に於ては、眞に威武も屈すること能はず、富貴も淫すること能はざる底の氣魂をもつた人であります。

福澤諭吉は、天保五年に豊前の中津で生れました。父は福澤百助といつて、中津藩の士族で、藩の役目をつとめるために大阪に出張してゐました。父は大層書物が好きでその家には千五百冊あまりの書物がたくばへてあつたと云ひます。

三才の時、不幸にも父はなくなりましたので、母や兄弟と共に中津にかへりました。十二三歳の時から、白石といふ先生について勉強をしましたが、二十歳頃には、もう一かどの漢學者となつてゐました。所がこの中津藩の士族は、上下の別がきまつてゐて、下の身分のものはどうしても立身することが出来ません。そこで立身したいと思つてゐる諭吉は大層不平で、

『馬鹿々々しい、こんな所は我々の住むべき所でない。どこかへ行つて十分勉強し、天晴れ身を立て名をあげねばならぬ。』

と思つて、長崎へいつて砲術を學びました。先生は山本といふ人でしたが、この家に世話になつてゐる間の勉強といふものは、それは／＼實に非常なもので、學問の方に



も、家の仕事の方にも、萬事を一身に引きうけてやつてゐました。この時、先生から見込まれて、養子にしたいとまで思はれた位でした。こんなに學問もよく出来るし、先生の信用も厚いものですから、同じ弟子の中の悪い者がこれを憎み、色々邪魔をして、諭吉は遂にそこを立ちのき、色々な辛苦をして大阪に行き、こゝで蘭法醫の緒方先生の門に入りました。はじめは大阪で兄の家に世話になつてゐましたが、後には自分で飯を焼き汁を煮、朝から夕方まで餘念なく勉強しました。所がそのうち兄が病氣のためになくなつて、諭吉は中津へ歸つて福澤家の務をせなければならぬやうになりました。併し諭吉が中津に居なくなかたのは最初からの心でしたから、家にあつた多くの書物や器具を皆賣拂つて、山ほどあつた家の借金を返してしまひ、又も大阪へいつて緒方先生の家に世話になり、一心に勉強してゐました。この頃、緒方先生の塾には、随分亂暴な者や、不品行のものがありませんでしたが、それらの人々の中にまじつた諭吉は品行正しく、たゞ／＼學問の外には餘念もありませんでした。

所が中津藩の奥平といふ人が、江戸で蘭學の塾を開かうと思つてゐましたが、よい先生がないので困つてゐる折柄、諭吉が蘭學には餘程秀でゝゐるといふことを聞いて、その先生に招きました。そこで諭吉は大阪を出て江戸へゆき、奥平氏の屋敷で生徒に蘭學を教へてゐました。安政六年に外國との條約が結ばれて、外國人も追々日本の土地に來かけました。或る時諭吉は横濱を見物に行きました所が、英吉利や佛蘭西の文字が多く路傍や家の看板にかいてあつて、それを見ても何の事だかさっぱりわかりません。こゝに於て諭吉は大いに奮發して、英語を勉強しようと思つてゐました。その頃のこと、諭吉はどうかして英語の字引を買ひたいと思つてゐますと、間もなく一人の商人が小さな字引をもつて來ました。直段はいくらかと聞くと、一冊の小さい字引が五兩だといひます。五兩といへば今でならば何十圓といふ金です。とても自分で買ふことが出来ぬので、奥平氏に頼んでそれを買つて貰ひました。